

福岡市
わき やま
脇 山 V

—県営圃場整備事業に伴う脇山A遺跡6次、大門遺跡1次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第344集

1993

福岡市教育委員会

わき やま
脇 山 V

—県営圃場整備事業に伴う脇山A遺跡6次、大門遺跡1次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第344集



遺跡略号 WKA-6
NNA-1
DMN-1
遺跡調査番号 9101

1993

福岡市教育委員会

序

福岡県の北西部、玄界灘に面して位置する福岡市には、豊かな自然と歴史的遺産が残されました。それらを保護し後世に伝えていく事は、言うまでもなく私共の務めであります。しかし、近年の福岡市のな著しい都市化により、それらが失われつつある事も事実です。

福岡市教育委員会では、これらの開発に伴いやむを得ず失われていく遺跡について、事前に発掘調査を行い、記録の保存に努めております。

本書は、昭和61年度から実施されている早良区脇山地区の県営団地整備事業に伴う発掘調査のうち、平成3年度に調査した脇山A遺跡の成果を報告するものです。調査では、縄文時代から中世にいたる数多くの遺構と遺物を発見しました。この結果、脇山地区の歴史の一部、および他地域との交流についての問題も明らかになりつつあります。

本書が埋蔵文化財への理解と認識を深める一助となり、また研究資料としてご活用頂ければ幸いに存じます。

最後に、発掘調査から本書の刊行に至るまで、多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対し、心から謝意を表する次第であります。

平成5年1月

福岡市教育委員会

教育長 井口 雄哉

例　　言

1. 本書は脇山地区県営園場整備にともない、福岡市教育委員会が1991年5月から10月にかけて発掘調査を実施した調査の報告書である。調査は脇山A遺跡、大門遺跡、野中遺跡にまたがり、順に6次、1次、1次調査に当たる。このうち、今回は脇山A遺跡6次、大門遺跡1次調査について報告する。
2. 本書使用の遺構実測図は、黒田和生、英豪之、加藤隆也、榎本義編、池田祐司を中心に作成した。
3. 本書使用の遺物実測図は、池田、榎本による。
4. 本書使用の挿図の製図は、屋山洋、榎本、池田、戸畠智恵子、太田次子による。
5. 本書使用の写真は、遺構を池田、榎本が、遺物を池田が撮影した。
6. 本書の作成にあたっては、有馬千恵美、上田保子、緒方まきよ、前田みゆき、松尾真澄の協力を得た。
7. 本書使用の方位は磁北である。
8. 遺構の表記はSK-土坑、SX-焼上坑とした。
9. 本書の執筆は、Iを浜石哲也が、他を池田が行った。
10. 本書の編集は榎本の協力を得て池田が行った。

本文目次

I	はじめに	1
1.	調査に至る経緯	1
2.	調査の組織	1
II	立地と環境	3
III	平成3年度の調査の概要	5
IV	脇山A遺跡群6次調査の記録	7
1.	1地点の調査	7
1)	概要	7
2)	遺構と遺物	7
2.	2地点の調査	12
1)	概要	12
2)	2-I 地点の遺構と遺物	12
3)	2-II 地点の遺構と遺物	15
3.	3地点の調査	21
1)	概要	21
2)	遺構と遺物	21
4.	4地点の調査	24
1)	概要	24
2)	遺構と遺物	24
5.	5地点の調査	28
1)	概要	28
2)	遺構と遺物	28
V	大門遺跡1次調査の記録	33
1)	概要	33
2)	遺構と遺物	33
IV	おわりに	40

挿図目次

Fig. 1	周辺の遺跡(1/75000)	2
Fig. 2	圃場整備年次事業地と遺跡群(1/12500)	4
Fig. 3	調査区位置図.....	6
Fig. 4	SK111実測図(1/20)	7
Fig. 5	1 地点遺構配置図(1/300)	8
Fig. 6	SK111出土遺物実測図(1/3)	9
Fig. 7	1 地点遺構実測図(1/40).....	10
Fig. 8	1 地点出土遺物実測図(1/3)	11
Fig. 9	2 - I 地点遺構実測図(1/40).....	12
Fig.10	2 - I 地点出土遺物実測図(1/3、1/1).....	13
Fig.11	2 地点遺構配置図(1/300)	14
Fig.12	SK205実測図(1/40)	15
Fig.13	SK205出土遺物実測図(1/3)	16
Fig.14	2 - II 地点遺構実測図(1/40).....	17
Fig.15	2 - II 地点出土遺物実測図 1 (1/3)	18
Fig.16	2 - II 地点出土遺物実測図 2 (1/3)	19
Fig.17	2 - II 地点出土遺物実測図 3 (1/3、1/1).....	20
Fig.18	3 地点遺構配置図(1/300)	21
Fig.19	3 地点遺構実測図(1/40)	22
Fig.20	3 地点出土遺物実測図(1/3)	22
Fig.21	4 地点遺構配置図(1/300)	23
Fig.22	4 地点遺構実測図 1 (1/40).....	25
Fig.23	4 地点出土遺物実測図 1 (1/3)	26
Fig.24	4 地点遺構実測図 2 (1/40).....	27
Fig.25	4 地点出土遺物実測図 2 (1/3)	28
Fig.26	5 地点遺構実測図(1/300)	29
Fig.27	5 地点遺構実測図(1/40).....	30
Fig.28	5 地点出土遺物実測図(1/3)	31
Fig.29	大門遺跡遺構実測図 1 (1/40).....	33
Fig.30	大門遺跡遺構配置図(1/300)	34
Fig.31	大門遺跡遺構実測図 2 (1/40)	35

Fig.32	大門遺跡出土遺物実測図 1 (1/3)	36
Fig.33	大門遺跡遺構実測図 3 (1/60).....	37
Fig.34	大門遺跡出土遺物実測図 2 (1/3)	38
Fig.35	大門遺跡出土遺物実測図 3 (1/3)	39

図版目次

- PL. 1 (1)脇山A遺跡1地点全景（東から） (2)脇山A遺跡2－I地点全景（東から）
PL. 2 (1)脇山A遺跡2－II地点全景（東から） (2)脇山A遺跡3地点全景（東から）
PL. 3 (1)脇山A遺跡4地点全景（東から） (2)脇山A遺跡5地点全景（北から）
PL. 4 (1)大門遺跡全景（東から） (2)大門遺跡全景（南から）
PL. 5 (1)SK111（北から） (2)SX102（東から） (3)SX104（北から） (4)SX105（北から）
 (5)2－II地点全景（南から） (6)SK205（北から）
PL. 6 (1)SK207（東から） (2)SX301（北から） (3)4－II地点全景（南から） (4)SK401（北
 から） (5)SK410、411、412（西から） (6)SK413（東から）
PL. 7 (1)SK503（東から） (2)SX504（東から） (3)SX512（東から） (4)大門遺跡SK001（南
 から） (5)大門遺跡SK008（南から） (6)大門遺跡SK015（東から）
PL. 8 脇山A遺跡出土遺物(1)
PL. 9 脇山A遺跡出土遺物(2)
PL. 10 (1)脇山A遺跡出土遺物(3) (2)大門遺跡出土遺物

I はじめに

1 調査にいたる経緯

福岡市早良区大字脇山一帯の開場整備事業が計画され、福岡市教育委員会埋蔵文化財課（当時文化課）に事業地内の埋蔵文化財の有無についての照会があったのは1984年（昭和59年）であった。翌年には、面積82.9haの事業地を対象に、1986年度から8ヶ年度にわたり開場整備が施行されることが決定した。

埋蔵文化財課ではこの事業に対応して、当該年度の事業地を試掘調査し、それに基づき遺跡の範囲を確定し、道路・水路などの構造物および削平を受ける田面について発掘調査を行うことにした。初年度の調査は1986年10月から始まり、以後今年度まで6ヶ年にわたって継続している（Tab.1）。1991年度は4月1日から国庫補助（詳細分布調査）による試掘調査を開始した。これを基に事業社側と調整をはかり、調査対象面積を最小にして本調査に入った。

年度	事業面積	調査対象面積	調査期間	調査遺跡群
1986	4.5ha	5600m ²	1986.10.14～1987.1.14	脇山A（1次）
1987	5.0ha	7150m ²	1987.8.4～12.28	脇山A（2次）
1988	11.4ha	6636m ²	1988.9.26～12.15	脇山A（3次）
1989	14.4ha	144000m ²	1989.7.1～1990.2.28	脇山A（4次）、谷口
1990	14.4ha	18718m ²	1990.5.23～12.28	脇山A（5次）
1991	14.4ha	10904m ²	1991.4.1～10.14	脇山A（6次）、野中、大門
1992	12.0ha	8958m ²	1992.4.13～10.16	脇山A（7次）、栗尾B

Tab.1 脇山開場整備事業地内発掘調査年次別一覧

2 調査の組織

県営脇山開場整備事業主体

福岡県農林事務所農地整備販賣課 福岡市農林水産局農業振興部農業土木課

福岡市脇山土地改良組合

調査主体

福岡市教育委員会文化財部 埋蔵文化財課

課長 折尾学

第1係長 飛高憲雄

第2係長 塩屋勝利

庶務 中山昭則

調査担当 濱石哲也 池田祐司 長家伸 横本義嗣

調査補助 英豪之 黒田和生

なお発掘調査が無事完了できたのは有田吉太氏をはじめとする多数の作業員の方々、また県農林事務所、市農業土木課、改良区の方々のご協力のたまものである。深くお礼申し上げたい。

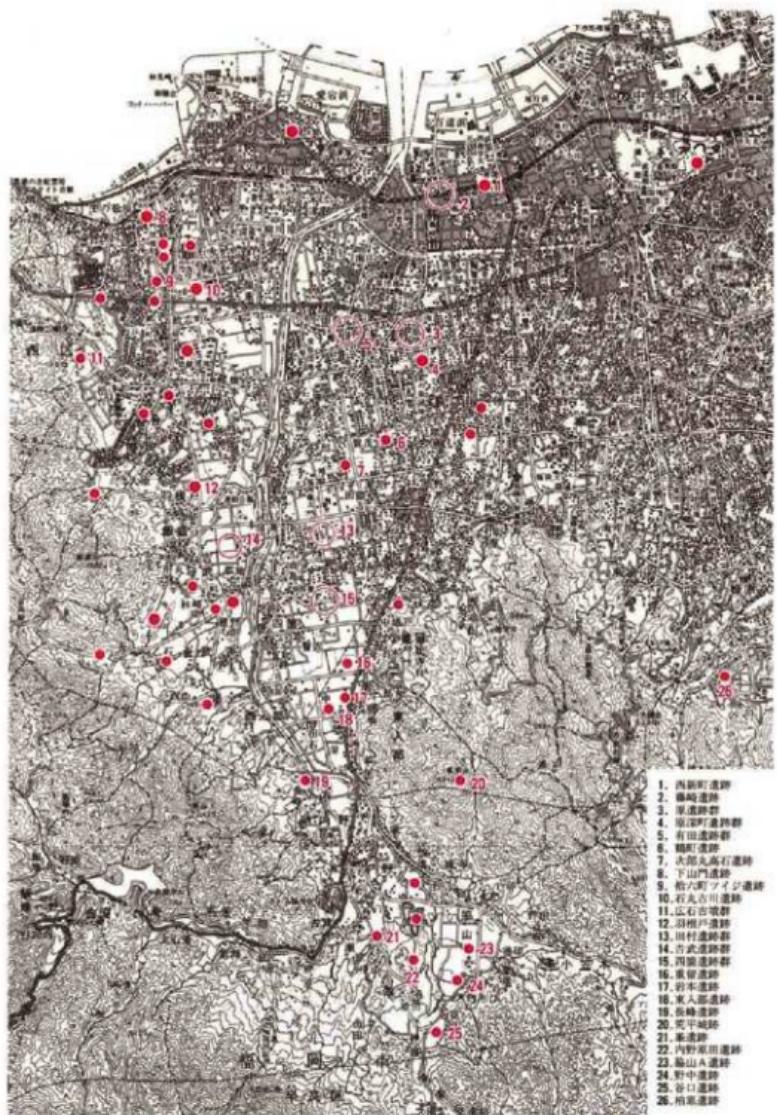


Fig. 1 周辺の遺跡 (1/75000)

II 立地と環境

玄海灘に面する福岡市には、西から糸島、早良、福岡、粕屋の大小平野が北の博多湾を囲むように広がる。これらの平野は山塊、丘陵によって分断され、各々が独自の自然、歴史環境を備えている。このうち早良平野には、福岡市の南西部に当たり、背振山脈に源を発する室見川が北流する。今回報告する脇山A、大門遺跡は、この平野の最奥部の小笠木川を挟んだ扇状地上に位置する。

歴史的にみると、山岳信仰の対象として宗教的権威を有した背振山東門寺の北麓にあたり平安時代末期以降その山領として知られる。また、耕地開発について、貞觀元年間に紀伊国熊野よりきた比丘尼が、釣堀、樋井手と呼ばれる堰をもうけ、水路を開き、田地灌漑の功をなしたという伝承がある。字谷口には、比丘墓と呼ばれる石塔があるが、形式は中世のものである。さらに脇山は、14世紀には集落として成立しており、15世紀には「森ノ名」^①に含まれていたことが文献資料による研究で明らかにされている。このように、中世以降の耕地、村落形成史を知る上でも興味深い地域である。

周辺の遺跡の発掘調査は、4次にわたる脇山地区圃場整備事業にともなう調査を中心に、板屋、内野等で行われている。旧石器時代では、脇山A遺跡^②2次調査において細石核が出土している。縄文時代は、脇山A遺跡^③の各地点、谷口遺跡^④において押型文、轟式、阿高系、磨消繩文土器、晩期の遺物が出土している。板屋、峯遺跡^⑤でも少量ではあるが、押型文土器、石簇等の遺物が出土している。刻目突帯文土器は、脇山A遺跡^⑥5次調査で1点出土したのみで、このあとの弥生時代以の遺物は極端に減少する。弥生時代では、脇山A遺跡^⑦2次調査において前期の遺物が、谷口遺跡で後期後半の甕が出土している。古墳時代では、脇山5次調査において6世紀の住居跡等が検出されている。古代では、峯遺跡で8世紀の掘立柱建物が、内野原田遺跡で9世紀と思われる製鉄遺跡が検出されている。中世になると遺構、遺物とともに脇山各所で検出される。そのうち最も広く分布するのが焼土坑で、これまでの調査から炭焼き遺構としての性格が考えられている。

また、宇野中には、昭和天皇の即位に際して行われた大嘗祭に用いられた新穀をとるための祭田（主基齊田）がある。

注)

- 1 吉良国光 1987 「背振山の所領支配と村落—筑前早良郡脇山を中心として—」『九州史学』特集号
- 2 福岡市教育委員会 1990 「脇山I」
- 3 福岡市教育委員会 1991 「脇山II」
- 4 福岡市教育委員会 1992 「脇山III」
- 5 福岡市教育委員会 1992 「脇山IV」
- 6 福岡市教育委員会 1987 「板屋、今津遺跡」
- 7 福岡市教育委員会 1989 「峯遺跡」

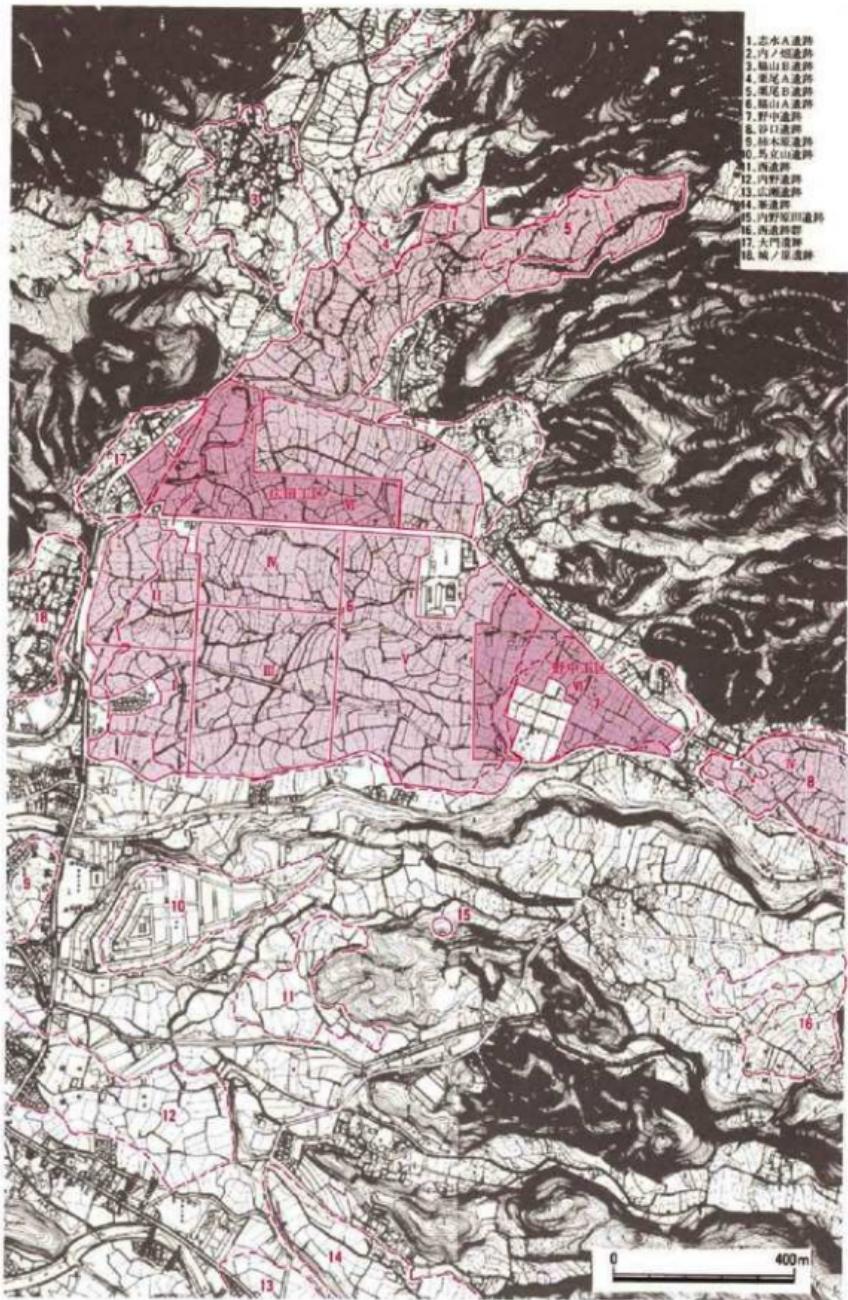


Fig. 2 園場整備年次事業地と遺跡群(1/12500)

III 平成3年度の調査の概要

平成3年度の脇山園場整備事業は野中工区、広田工区において実施された。その面積は14.4haである。野中工区は前年度の北側で、主基齊川の周囲に広がる扇状地上に位置し、野中遺跡に含まれる。広田工区は脇山A遺跡4次調査地点の東側にあたり、小笠木川を挟んで脇山A遺跡と、大門遺跡に分かれる。これまでの調査から縄文時代、中世の遺跡の広がりを予測された。

試掘調査 1991年4月1日から、4月半ばにかけて園場整備地内遺跡群詳細分布調査として実施した。この調査は、遺跡の範囲、遺構の時代と性格、遺構面までの深さ、埋蔵状況などを把握し、園場整備事業との調整を行うのが目的である。試掘トレーナーは、主に地形に沿う形で、重機（バックホー）を用いて野中工区で39本、広田工区で52本を掘削した。

その結果、両工区において縄文時代、中世の遺物を採集し、中世のものと思われる遺構が集中する地点、焼土坑の分布を確認するとともに、現水路に沿った旧河川と表土直下で砾が露出して遺構の広がりが認められない範囲を確認した。

埋蔵文化財課はこの試掘結果をもとに、事業地内の遺構の分布とその性格、深度などとともに当初事業計画による要発掘調査面積を事業所に提示した。これに対し事業者は盛土、田面高の変更を行い、協議の結果、提示した要調査面積21106m²を10904m²に縮小し、調査区が決定した。なお、野中工区内の調査は野中遺跡1次調査、広田工区内は脇山工区内は脇山遺跡A地点6次調査、大門遺跡1次調査にあたる。

本調査 試掘調査終了後の5月13日から野中工区の道路、要排水路の構造物計画地から調査を開始した。南北に長い1地点では1-II地点を除いて遺構は薄く、焼土坑を疎らに検出した。1-II地点では、焼土坑、中世の遺構とともに縄文時代の遺構と包含層を確認し、遺構の調査の後2mグリッドを設けて包含層の調査を行なった。丁度梅雨に当たり、しばしば調査区が水没したため一時調査を中断し、2地点、3地点の調査を行なった。2地点では中世のピット群を検出した。ここは、窪名館推定地に近く、注目される。3地点は小さな谷を挟んで1-II地点の正面に位置する。焼土坑のほか、谷の落ち際に縄文時代晚期を中心とする包含層を検出した。

広田工区は8月から、脇山A遺跡II地点の調査を開始した。2地点は、小河川によって2区に分かれる。2-I地点では焼土坑を検出し、石器を多く採集した。2-II地点は、中世の遺構が集中した脇山A遺跡4次調査12地点に隣接しており、比較的多くの遺構と遺物を検出した。次に、小笠木川を隔てた大門遺跡の調査を行い、中世の遺構を検出している。その後脇山A遺跡3、4、5、1地点と調査をすすめた。4地点は、用水路計画地で、調査区の幅が狭く遺構の性格ははっきりしないが、中世のものと思われるピット群を検出した。1、3、5地点では焼土坑を検出した。また、1地点では縄文時代晚期の土器を、5地点では押型文土器を検出した。

以下脇山A遺跡6次調査、大門遺跡1次調査について、各地点ごとに記述を進める。野中遺跡については整理の都合により後日報告する予定である。

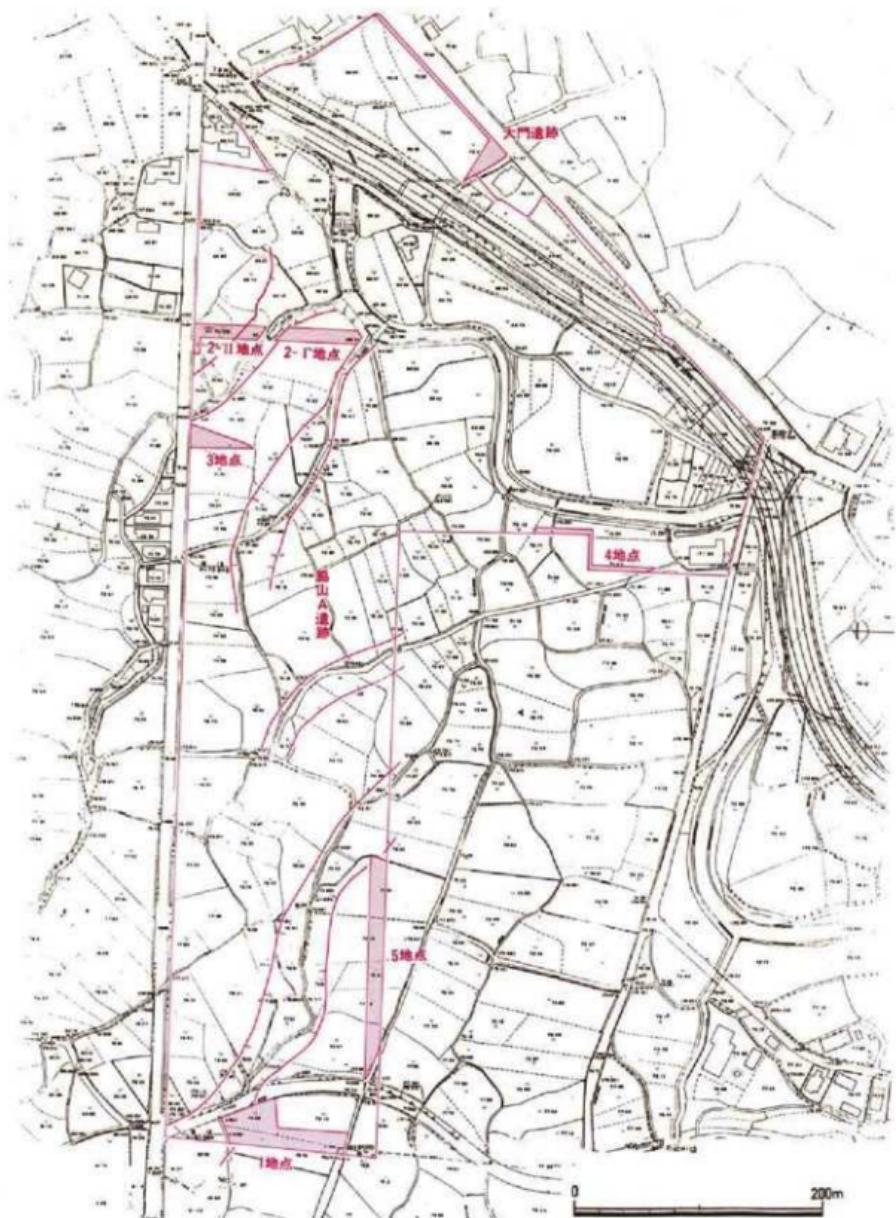


Fig. 3 調査区位置図

IV 脇山A遺跡群 6次調査の記録

脇山A遺跡は背振山塊の北麓、椎原川と小笠木川に挟まれた扇状地上にある。今回報告する6次調査は、遺跡群の北東の小笠木川に面する一帯で行った。現在の水路に沿って旧河川が流れ、大きく3つのまとまりに分かれる。ほぼ全域で焼土坑を検出し2-Ⅱ地点、4地点で中世の遺構の集中をみた。縄文時代については、1地点で晩期の土器、2-Ⅱ地点で石器、4地点で押型文土器を、検出している。

1 I 地点の調査

1) 概要

I 地点は今年度の調査区の南端にあたる。道路、用水路建設及び田面の削りに伴い899m²を調査した。調査地点は耕作土の直下が黄色土となり、一部礫がみられるが安定して広がり、遺構はこの面で検出される。調査区東側には水路が流れおり、東端には旧河川の段落ちが認められる。西側では緩やかな傾斜で落ちていき、礫が露出する。また、現在の田面成形による削平が著しく、遺構面においても段差が生じている。検出した遺構は土坑1基、焼土坑9基である。上段にはピット群を検出したが特にまとまらない。下段には溝状の遺構があるが、埋土は耕作土床土で遺物も見られない。

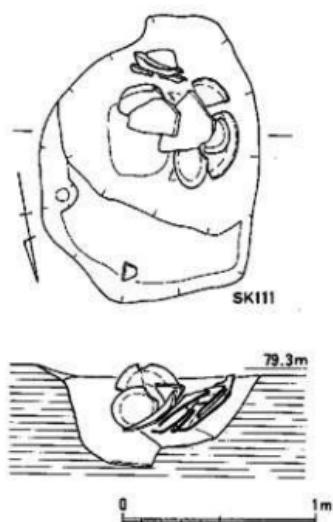


Fig. 4 SK111実測図(1/20)

2) 遺構と遺物

(1) 土坑

SX111 (Fig. 4) 調査区の東側の南壁きわに位置する。円形のピット状を呈し100×75cmを測る。最深部は30cmを測る。茶褐色土を埋土とする。南側の壁に土師皿7枚、上師器の环が埋地された状態で、甕の破片がそれにかぶさるようにして出土した。また、青磁碗片も出土している。甕は胴部破片が3片に分かれ、接合するが図示していない。外面に煤が付着する。

出土遺物 (Fig. 6) 1~7は土師皿である。全てが内面なで調整で、糸切り底に板目压痕が残り、橙白色を呈す。口径は順に9.2、9.2、9.3、9.35、9.4、9.55、9.7cmを測り、平均9.39cmである。器高は1.5、1.4、1.5、1.5、1.45、1.6、1.5cmを測り、平均1.49cmである。

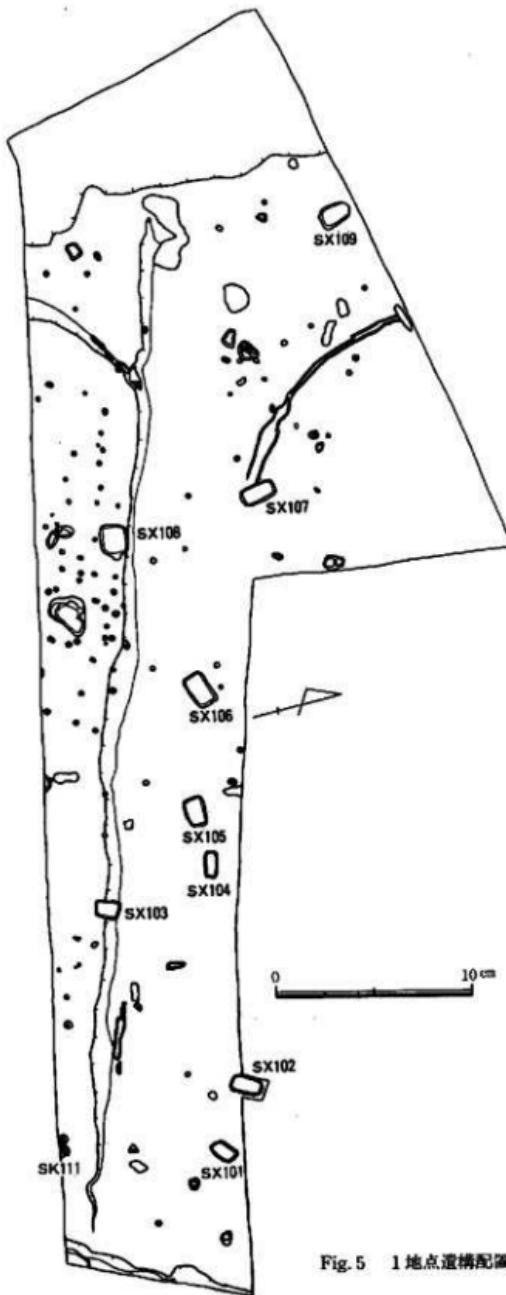


Fig. 5 1地点遺構配置図(1/300)

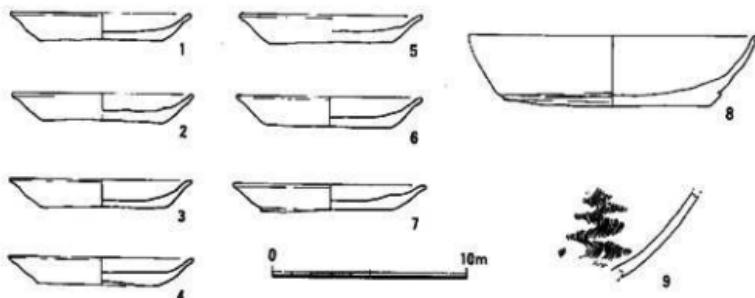


Fig. 6 SK111出土遺物実測図 (1/3)

8は土師器の坏で内面はなで調整、底は糸切りで板目压痕が残る。内面の一部に炭化物が付着し、外面は全面に煤が付着する。口径14.8cmを測り、黄白色を呈す。9は白磁碗で内面に描描きの波状文を施す。釉はわずかに緑色を帯びた淡灰色を、胎土は青色がかかった灰白色を呈す。外面には粗い貢入が入る。

(2) 焼土坑 (Fig. 7)

9基を検出した。いずれもほぼ長方形を呈し、壁の一部もしくは4面が焼け、床に炭が溜まる。下段のものは水田造成時に特により大きな削平を受けている。遺物は縄文土器、黒曜石の剝片等で、遺構にともなうものはない。

SK101 南側と東西の壁が焼ける。不整の長方形を呈し、70×33cm、深さ20cmを測る。

SK102 形が残る炭が床に残る。縄文土器を多く出土した、168×80cm、深さ28cmを測る。

SK103 南半が水田造成時に削平を受ける。128+α×88cm、深さ30cmを測る。

SK104 幅の狭い長方形を呈す。136×60cm、深さ10cmを測る。

SK105 大きく削平を受けたものと思われる。160+α×104cm、深さ18cmを測る。

SK106 東側がやや広めの長方形をなす。176×114cm、深さ16cmを測る。

SK107 わずかであるが床面も焼ける。186×90cm、深さ24cmを測る。

SK108 隅丸の正方形に近いプランをなす。164×68cm、深さ28cmを測る。

SK109 不整長方形をなす。30cm大の礫がある。160×108cm、深さ18cmを測る。

(3) その他の遺物

調査区内で検出した遺物で、表採、検出面、遺構に明らかに混じったものをまとめて扱う。10から15は縄文時代の鉢である。10は緩やかに外反し、外面は削り調整の後などで、内面は丁寧ななで調整で平滑である。外面淡茶色、内面暗灰色を呈す。11はなで調整で仕上げるが、外面

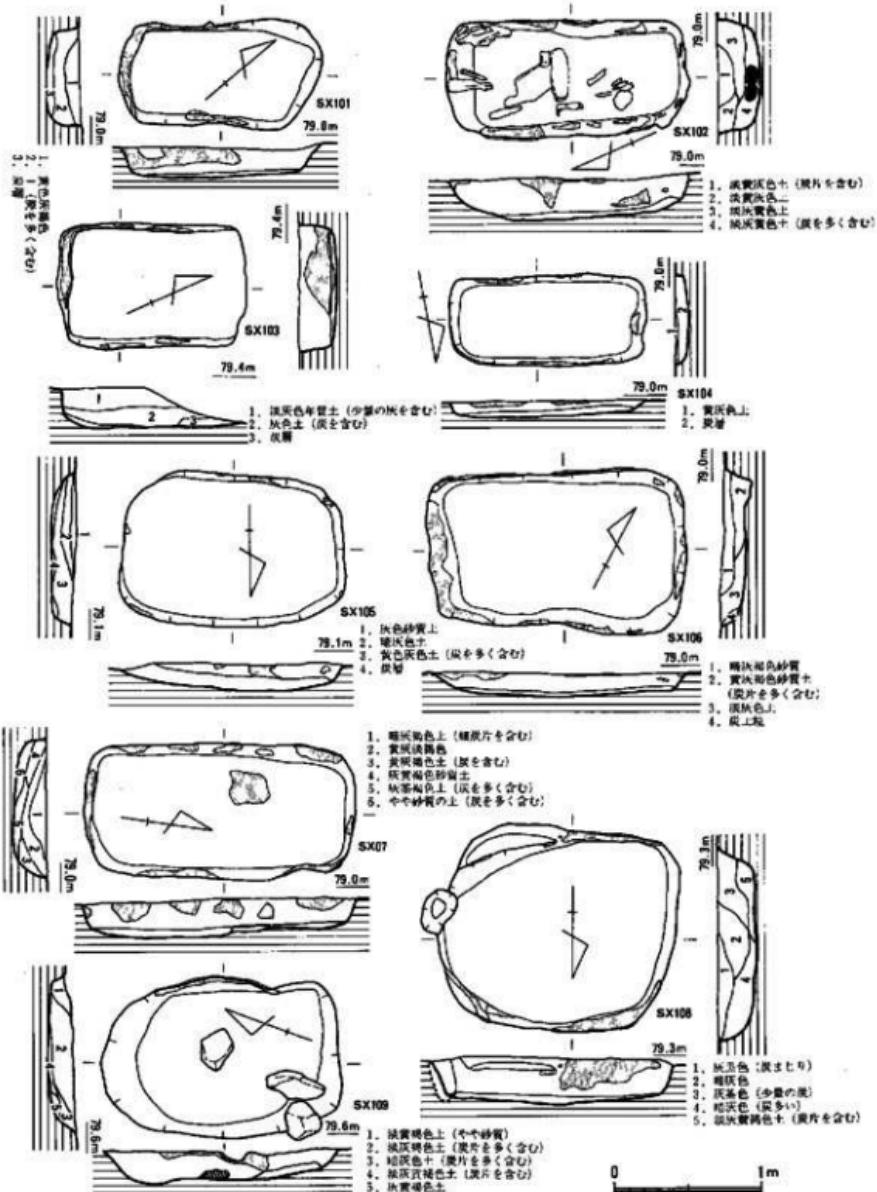


Fig. 7 1 地点遺構実測図(1/40)

にわずかに2枚貝による条痕が残る。外面淡茶褐色、内面暗灰色を呈す。12は外面にわずかに削り痕が残りなで調整である。外面淡黄灰色、内面暗灰色を呈す。13は内面が丁寧ななでまたは研磨調整で平滑である。14は深鉢の屈曲部で内外面とも二枚貝による条痕である。外面頸部はなで調整の後削りまたは平行沈線を施す。胎土にカクセン石を含む。15は深鉢の肩部になると思われる。条痕調整のちなで調整を施し、リボン状の突起を貼付する。内面は粗れており調整不明瞭だが、条痕のちなでと思われる。外面は淡黄茶色で煤が付着し、内面は灰褐色を呈す。晩期中葉のものと思われる。16は弥生時代中期の甌である。外面を刷毛目調整、口縁部を横なで、内面は丁寧ななで調整である。淡橙色を呈す。 $\frac{1}{4}$ からの復元口径32.6cmを測る。17は高壺の脚部と思われる。小片であるため断言できない。器面が粗れ、淡橙色を呈すが橙色であったものと思われる。18は土師器の甌で刷毛目調整を施す。19は青磁甌である。釉は闊った

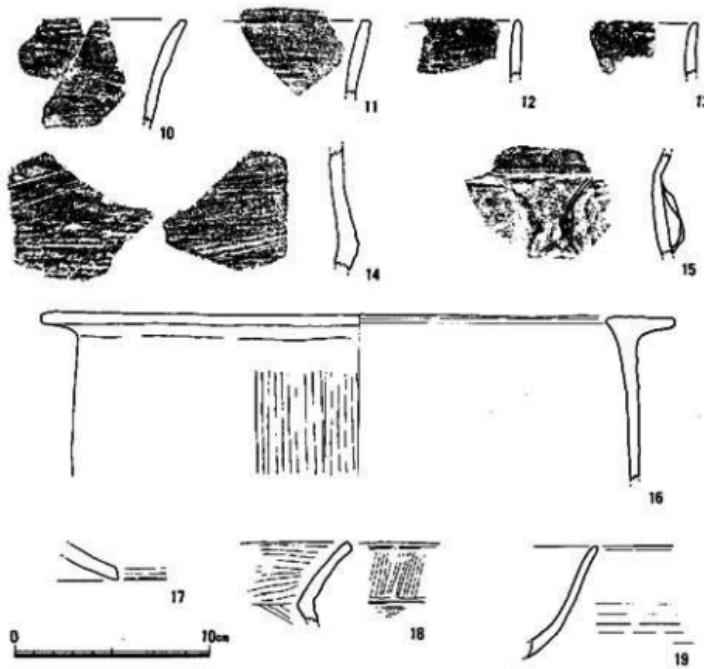


Fig. 8 1 地点出土遺物実測図(1/3)

緑色、胎土は淡灰色を呈す。内面には貫入が入る。

2 2 地点の調査

1) 概要

2地点は道路及び用・排水路の構造物について調査を行った。調査区のはば中央に現在の小河川が通り、これを境に2-I地点、2-II地点とした。2-I地点は扇状地が尾根状に小笠木川に張り出した末端に位置する。耕作土直下の安定した黄褐色土で遺構を検出した。標高70mを測る。検出遺構は土坑、焼土坑とピット群である。石器を採集したが、これに伴う時期の遺構は検出できなかった。2-II地点は調査区の東半が砂礫で東に向かって落ち、現在の小河川の原形をなすものと思われる。西半も黄褐色土に多くの礫が露出しており、安定していない。土坑7基、焼土坑2基、溝1、ピット群を検出した。溝は水田床土を埋土とし、ピット群はあまりを成さないため特に詳述しない。便宜上各地点ごとに記述する。

2) 2-I 地点の遺構と遺物

(1) 土坑 (Fig. 9)

SK203 調査区にかかり北半のみ掘削した。円形を呈すと思われ、深さ20cmを測る。埋土は暗茶褐色土である。

出土遺物 (Fig.10) 20は須恵器の环蓋で端部には小さな返りが付く。%からの復元口径は15.2cmを測る。古代のものである。

(2) 焼土坑 (Fig. 9)

SX201 圓丸の長方形を呈す。壁の各辺が少しづつあるが焼ける。136×92cmを測り、深さ14cmを測る。遺物は出土していない。

(3) その他の遺物

表土、遺構検出面で採集した遺物を報告する。21は土師器の碗で糸切りである。%からの復元口径は14.4cmを測る。22から24は土師皿である。22は内面になで調整を施さず、範切りと思

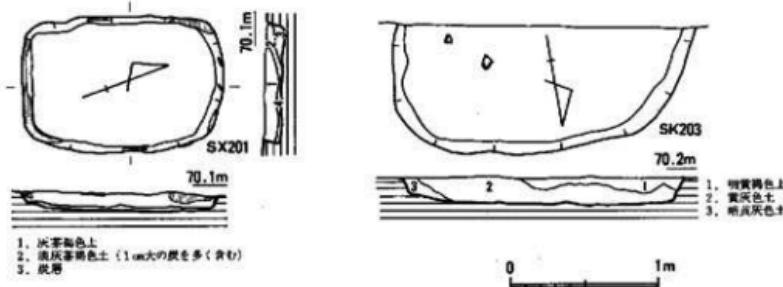


Fig. 9 2-I 地点遺構実測図(1/40)

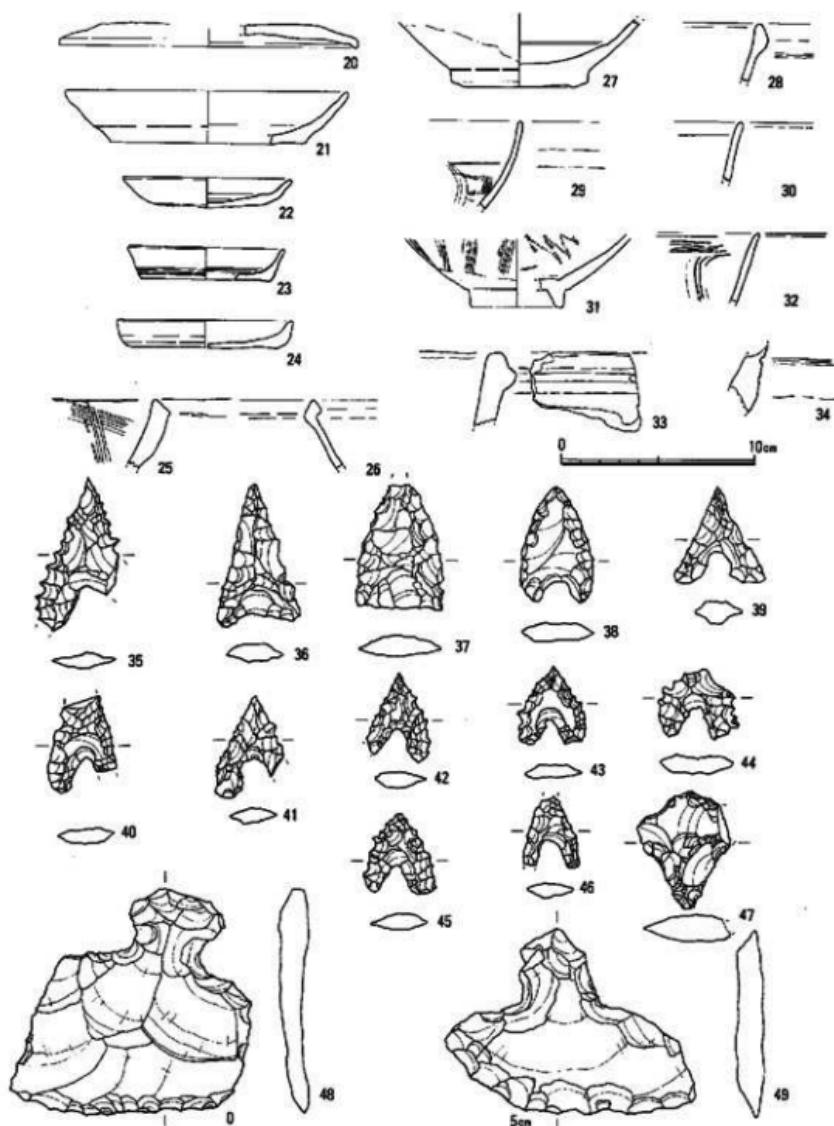


Fig.10 2-1 地点出土遗物实测图(1/3, 1/1)

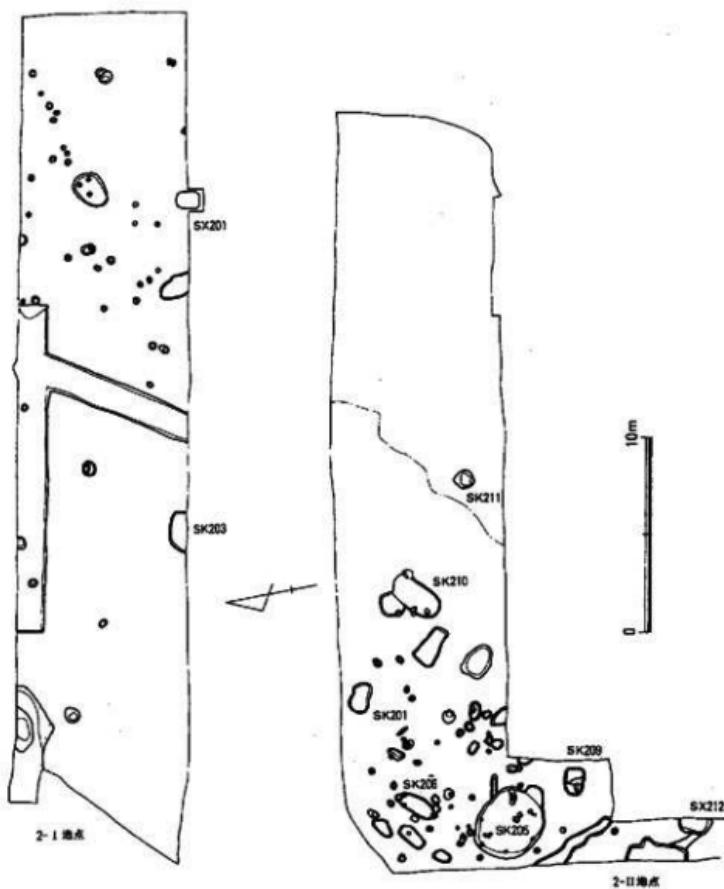


Fig.11 2 地点造構配置図(1/300)

われる。板目圧痕がみられ、口径8.5cmを測る。23、24は糸切り底で $\frac{1}{4}$ からの復元口径は順に7.9、8.9cmを測る。2.5は瓦質の擦鉢で内面は刷毛目調整。26は陶器で壺になると思われる。剥げているが内外面に灰緑色の釉がかかる。27から29は白磁碗である。27、28の釉は乳白色で17の外面下半は露胎で $\frac{1}{4}$ からの復元である。29は淡緑灰色を早す皿である。30から32は青磁碗である。30は茶緑色、31、32は淡緑色を早す。31外面下部は露胎である。34は滑石製の石鍋で外面は煤ける。34は滑石を混入する繩文土器で外面に深い沈線を施す。35から44は石鏡である。36、

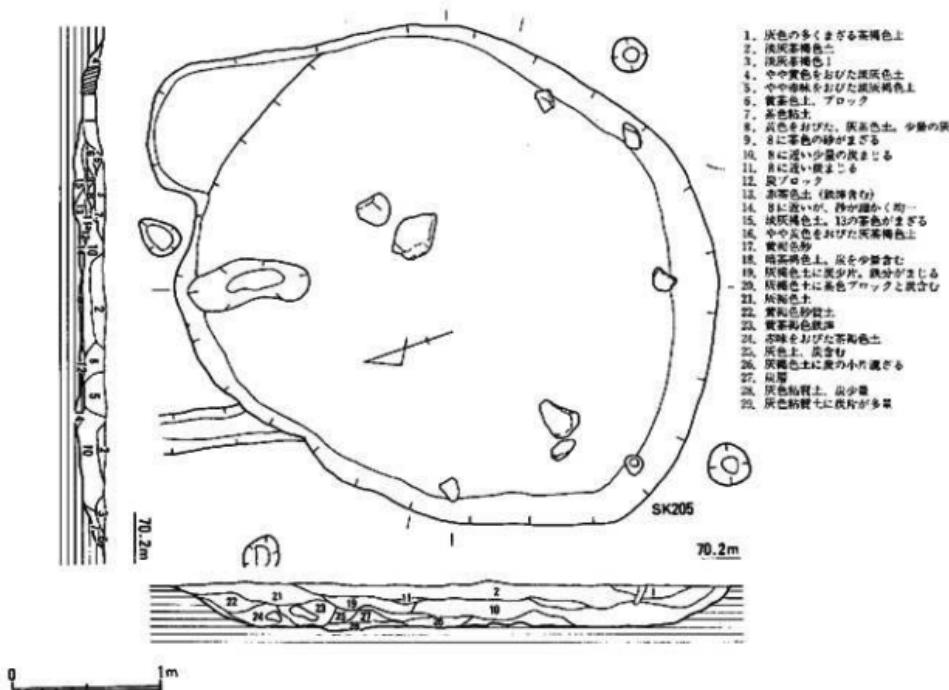


Fig.12 SK205実測図(1/40)

39は安山岩製で他は黒曜石製である。順に0.64g、1.08g、1.16g、0.92g、0.44g、0.44g、0.37g、0.28g、0.30g、0.40g、0.32g、0.12gである。47は黒曜石製の石錐で1.10gを測る。48、49は安山岩製の石匙で、5.95g、5.27gを測る。

3) 2-II地点の遺構と遺物

(1) 土坑

SK205 (Fig.12) 方形に近い円形の土坑でプランは370×320cm、深さ30cmを測る。砂、炭混じりの粘質土を埋土とする。鉄滓が床近くから出土しているがまとまりではなく、床は焼けていない。近接する駿河A遺跡3次調査は12-II地点(『駿河A』参照)に同様の遺構がでており関連があると思われる。

出土遺物(Fig.13) 50、51は土師皿である。糸切り底で順に1/4、1/4からの復元である。52は陶器と思われるが図示した部分での施釉はない。沈んだ茶褐色を呈す。1/4弱からの復元である。

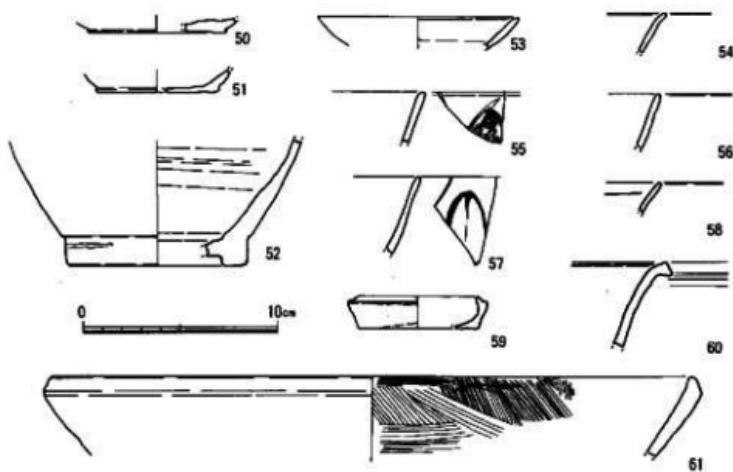


Fig.13 SK205山土遺物実測図(1/3)

53、54は口壳の白磁である。青みを帯びた乳白色を呈す。55から57は織文弁文を施す青磁碗である。釉の色は順に深い緑色、青灰色、淡青緑色を呈す。其入は見られない。58は青磁皿で淡緑灰色を呈し粗い貫入が入る。59は青磁の合子で釉は青みがかった緑色である。外面の返り部、底は露胎である。 $\frac{1}{2}$ からの復元で、径に疑問が残る。60は褐釉陶器である。52と同一個体の可能性がある。61は瓦質の鉢で内面刷毛調整で乳白色を呈し、外面は黒色である。 $\frac{1}{2}$ からの復元口径は33.4cmを測る。

SK206 (Fig.14) 椎円形のプランを呈す。220×90cm、深さ13cmを測る。埋土は茶褐色土で少量の炭化物と、多くの拳大の礫を含む。両端のピットはSK006を切る。遺物の出土はない。

SK207 (Fig.14) 不整椎円形のプランで158×102cm、深さ15cmを測る。茶褐色土を埋土とする。遺物は出土していない。

SK208 (Fig.14) 圓丸長方形を呈し166×123cm、深さ20cmを測る。20~30cm大の礫がほぼ同レベルで配置される。床は中央がやや下がるが平坦に近い。埋土は暗茶褐色土でわずかに炭粒を含むがめだったものではない。ほぼ完形の土師皿が2枚埋置される。釘も2本出土したが木棺等を推測できるような配置ではない。

出土遺物 (Fig.15) 62、63は糸切り底の土師器の壊である。62は板目压痕を残す。 $\frac{1}{2}$ からの復元口径11.6cm、器高2.5cmを測り、淡褐色を呈す。63は口径11cm器高3.1cmを測り、淡灰褐色を呈し外面には煤が付着する。78、79は鉄釘である。

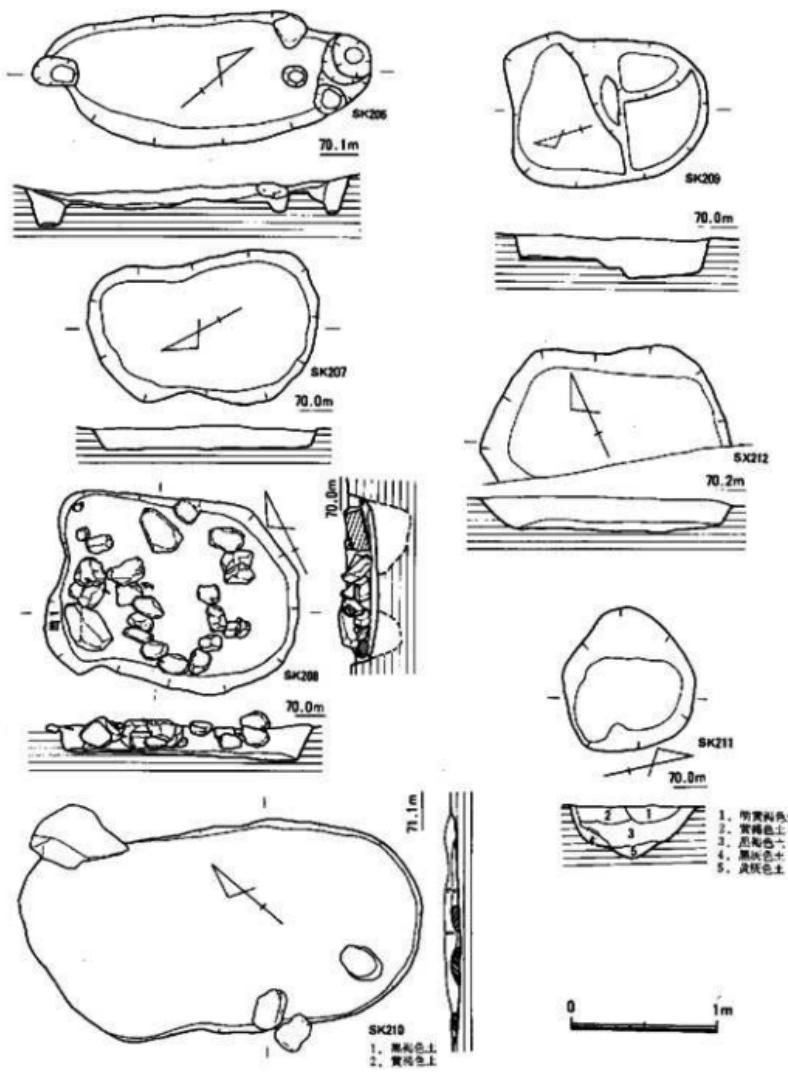


Fig.14 2-II 地点遺構実測図(1/40)

SK208 (Fig.14) 不整橢円形を呈し148×120cm、深さ18cmを測る。淡黄褐色土を埋土とする。

出土遺物 (Fig.15) 64は糸切り底の土師器の杯で灰白色を呈す。65からの復元口形は15.6cmを測る。65から67は青磁である。65は深い緑色を呈し体部内面を分割する3条の沈線が描かれる。深い緑色を呈す。66、67は模描文が施され底、脚部は露胎である。68は69からの復元口径は9.5cmを測る。

SK210 (Fig.14) 長楕円形を呈す浅いくぼみ状を呈す。暗褐色土を埋土とする。

出土遺物 (Fig.15) 68は糸切り底の土師皿で復元口径10cmを測る。他に白磁皿、陶器片が出士した。

SK211 (Fig.14) 不整円形の土坑で100×90cm、深さ36cmを測る。しまりのない黒褐色土を埋土とする。

出土遺物 (Fig.15) 69は土師質の蓋で外面には刷毛目がはっきりと残る。黒褐色を呈し、65からの復元口径14cmを測る。70、71は瓦器碗である。70は内面は黒色、外面は淡橙色を呈す。

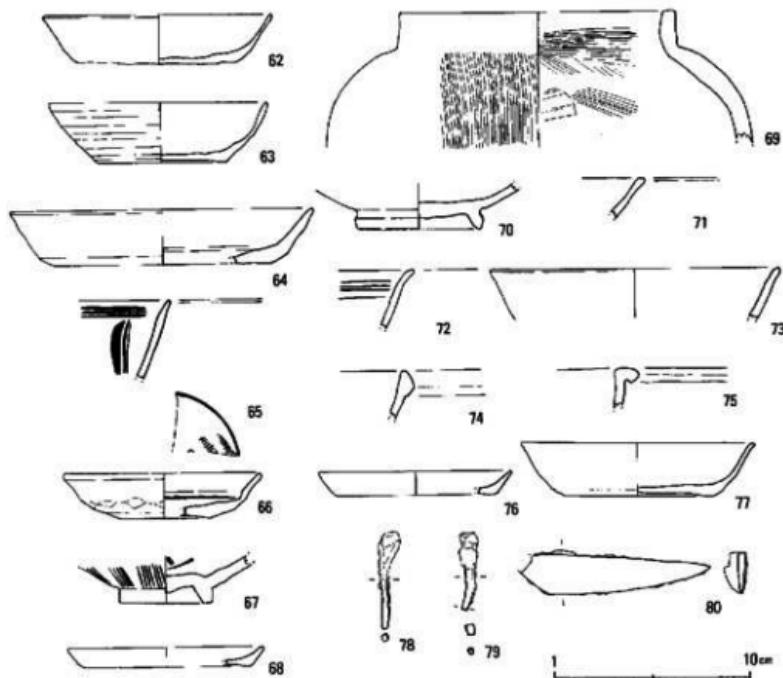


Fig.15 2-II地点出土遺物実測図1(1/3)

74、75は青磁碗である。72は淡灰色を呈し内面に白色の線が描かれる。細かい貫入が入る。73は深い緑色を呈し、 $\frac{1}{6}$ からの復元口径は14.6cmを測る。74は白磁碗で粗い貫入が入る。75は砂粒を多く含む上器片で逆L字状に屈曲する。

(2) 焼土坑

SX212 (Fig.14) 調査区にかかり全容は不明だが、不整長方形を呈すと思われる。壁で焼けた部分は少ない。

(3) ピット出土の遺物 (Fig.15)

76は糸切り底の土師皿で橙色を呈し、内面に煤が付着する。 $\frac{1}{4}$ からの復元口径は9.5cmを測る。77は土師器の碗である。糸切り底で淡橙色を呈す。復元口径11.8cm、器高2.7cmを測る。80は、鉄製品で刀子と思われる。

(4) その他の遺物 (Fig.16)

81から84は陶器である。81は釉がほとんどとぶが、黄色が強い褐釉と思われる。胎上は淡橙

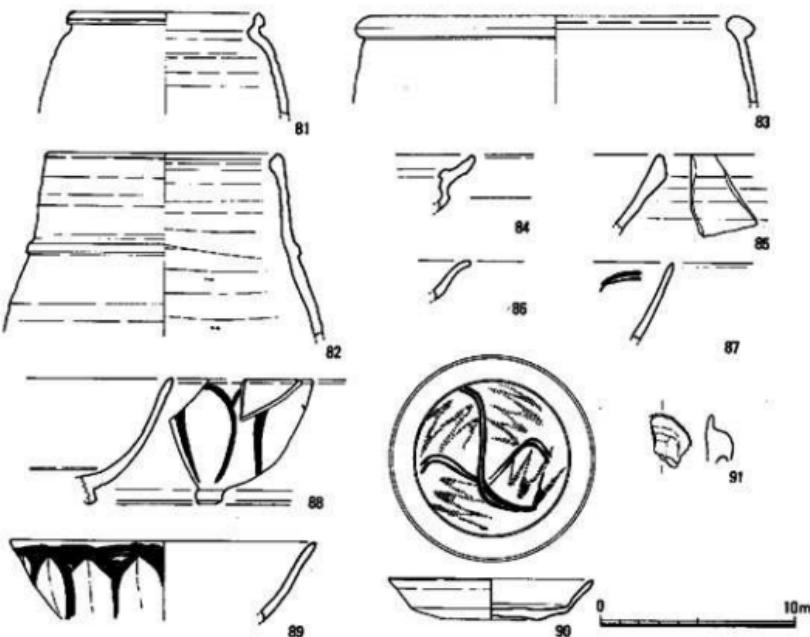


Fig.16 2-II地点出土遺物実測図2(1/3)

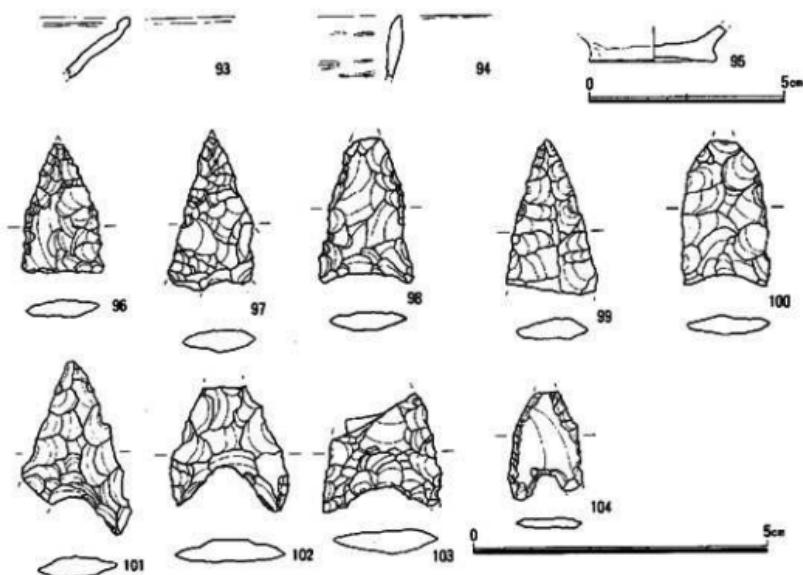


Fig.17 2-II地点出土遺物実測図3(1/3、1/1)

色を呈す。 $\frac{1}{4}$ からの復元口径は9.3cmを測る。82は黄褐色から褐色の釉が内外面にかかる。胎土は赤褐色で焼きが固い。 $\frac{1}{2}$ からの復元口径は20.3cmである。83は外面に暗茶褐色の釉がかかる。胎土は赤褐色を呈す。 $\frac{1}{4}$ 弱からの復元口径は11.5cmを測る。84は釉が剥げたものと思われ暗茶褐色を呈す。85は瓦質の鉢である。口縁部は暗黒色、体部は灰白色を呈す。86は白磁皿でやや青みがかり、細かい貫入が入る。87から89は青磁碗である。87は体部内面を沈線で分割する。深い緑色を呈し細かい貫入が入る。88、89は連弁文を施す。88は釉が薄く、淡く沈んだ緑色を呈す。89は釉が厚く、粗い貫入が入り深い緑色を呈す。 $\frac{1}{4}$ 弱からの復元口径は15.5cmを測る。90は同安窯系の青磁皿で底の釉を搔き取る。淡緑色を呈し、口径10.5cmを測る。91は滑石製品である。つまみ状の突起に摩滅した面が付く。つまみ部には穿孔があり、赤色顔料が残る。また、つまみの根元には炭化物が付着する。 $\frac{1}{4}$ 強が残存するものと思われる。93から95は繩文土器である。93は浅鉢で本来黑色磨研土器であるが器面が粗れており淡橙色を呈す。砂粒を多く含み、もともと雑なつくりであったと思われる。94は外面を丁寧なまで、内面には研磨調整を施している。くの字に屈曲すると思われる。暗灰色を呈す。95は底部で、器面が粗れている。浅鉢になる可能性もある。96から104は石器である。96、97、103は黒曜石製、他は安山岩製である。順に0.83g、1.48g、1.34g、1.40g、1.41g、1.41g、1.22g、0.67gを測る。

3 3地点の調査

1) 概要

3地点は2-IIの南側にあたる。用水路建設、および田面の削りに伴い289m²を調査した。調査地点は耕作土の直下が黄色土となり、この面で遺構を検出した。標高は71.2m前後である。焼土坑3基と溝、ピットを検出した。溝の埋土は水田耕作土であり特に詳述しない。ピットには特にまとまりはない。

2) 遺構と遺物

(1) 焼土坑 (Fig.19)

SX301 囲丸の不整長方形を呈し、178×116cm、深さ20cmを測る。壁のみでなく床も部分的に焼ける。

SX302 小型の不整長方形を呈し、128×72cm、深さ13cmを測る。床に小ピットがあり炭混じりの灰色土がたまる。

SX303 北辺が長い不整方形を呈す。長軸は94cm、短辺の北側が126cm、南側が60cm、深さ30cmを測る。

(2) 出土遺物 (Fig.20) 105から107は縄文土器である。105は内外面とも擦痕が残る。外面暗褐色、内面淡褐色を呈す。106は破断部付近で屈曲するものと思われる。外面には影りの深い条痕がなで調整の後に施される。内面はなで調整である。外面は淡橙色から暗灰色、内面は灰色を呈す。砂粒を非常に多く含む。107は精製の深鉢の口縁帶でわずかに内傾または直口する。外面には深く幅が広い沈線が左から右方向に施される。内面は研磨調整である。外面は淡黄褐色、内面は暗褐色を呈す。108は土師質の摺り鉢で、横描き状の擦り目が密に施される。淡

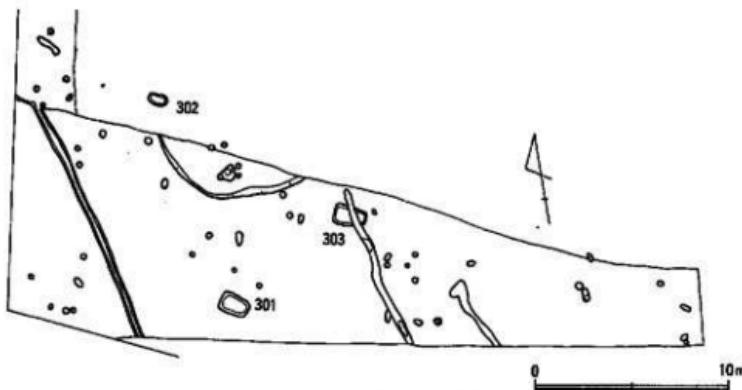


Fig.18 3地点遺構配置図(1/300)

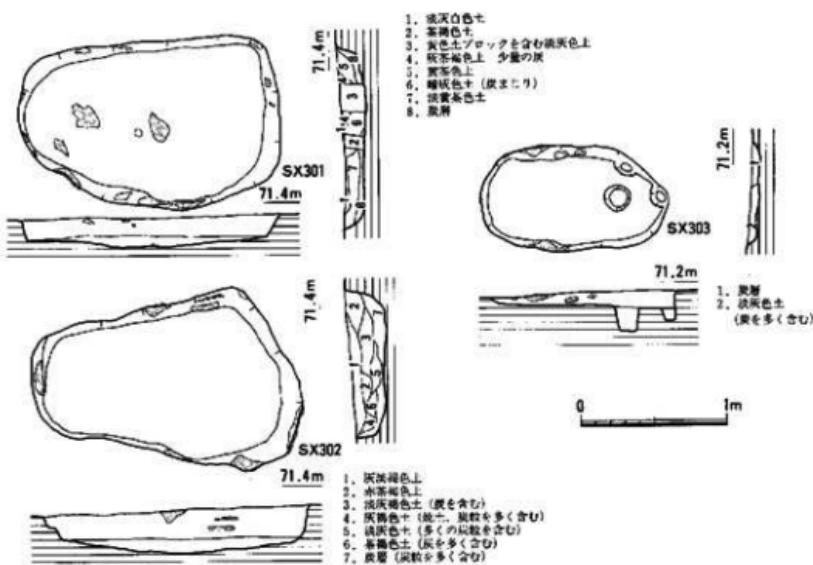


Fig.19 3 地点遺構実測図(1/40)

橙色を呈す。109は瓦質土器で黄白色を呈し、口縁部のみ灰色。110は白磁碗で黄白色を呈し、細かい貫入がいる。111、112は青磁碗である。111の外面には錦連弁文が施される。深い緑色を呈す。112は内面に飛雲文が見られる。青緑色を呈す。

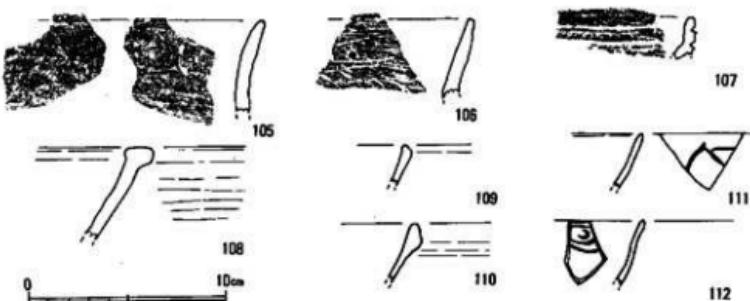


Fig.20 3 地点出土遺物実測図(1/3)

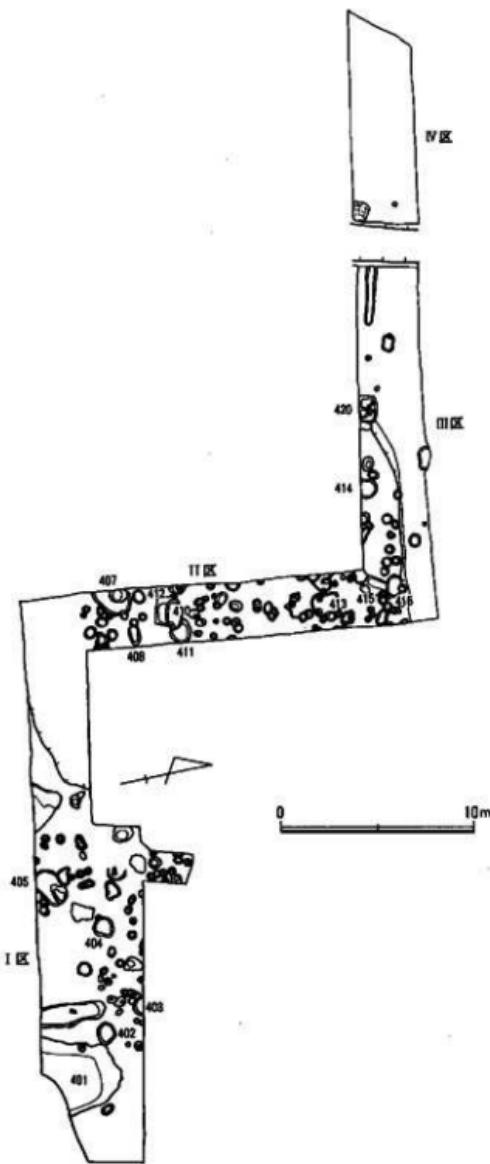


Fig.21 4地点遺構配置図 (1/300)

4 4 地点の調査

1) 概要

脇山A遺跡北東隅に位置する。用水路建設に伴い277m²を調査した。すぐ北側に小笠木川が流れ、調査区内は粗い砂地で古い氾濫の中にあたる。そのため、当初遺構の存在を予想していなかった。遺構は耕作土、床土、灰色土下、地表より約40cmの砂層面で検出した。遺構の埋土はおおむね灰茶色の粘質土である。調査区が細く屈曲しているため、記述の都合上I区からIV区に分けた。1区の西端、東端は礫層となり遺構はみられない。III区からIV区には段落ちがみられ、小笠木川へと落ちる。検出した遺構は土坑15基、と多数のピットである。ピットは調査区が限られるためまとまりはみられないが1区の北側に広がり、建物が立つものと思われる。

2) 遺構と遺物

(1) 土坑

SK401 (Fig.22) I地点の東端に位置し南側が調査区外にでる。不整形で大型の土坑である。明瞭な壁をもたず緩やかに落ち、くぼみ状である。埋土は上層は砂質の淡黄色土と灰色土がブロック状に混じり合い、下層は灰色の粘質土で砂を多く含む。水田耕作土ではない。

出土遺物 (Fig.23) 113は火舎である。内面には横方向の刷毛目状の調整痕が残り、外面には2本の細い突帯間に菱形のスタンプ文が施される。暗灰色を呈する。114から116は堀り鉢である。114、115は上部質で、内面横、外面縦方向の刷毛調整が残る。114には外面に煤が付着する。116は瓦質に近い。117から119は土鍋である。いずれも内面横方向の刷毛調整、外面はなで調整で118には刷毛目痕がわずかに残る。120は青磁で淡い青緑色を呈す。121、122は明代の染め付けである。121は口縁部に界線が巡り、外面体部には花文を施す。122には見込みに目跡が残り疊付きは露胎である。

SK402 (Fig.22) 不整形の浅い土坑で120×92cm、深さ15cmを測る。時期不明。

SK403 (Fig.22) 調査区にかかる。埋土は砂質のは茶褐色土である。

SK404 (Fig.22) 不整形の浅い土坑である。45×44cm、深さ10cmを測る。

SK405 (Fig.22) 植円形を呈す。北東隅は落ちる。193×118cm、深さ12cmを測る。

SK407 (Fig.22) 一部調査区にかかる。植円形を呈すと思われる。

SK408 (Fig.22) 長楕円形を呈す。茶褐色砂質土を埋土とする。102×50cm、深さ35cmを測る。

SK410 (Fig.22) 長楕円形を呈す。淡灰褐色土を埋土とする。142×80cm、深さ16cmを測る。東側のピットとは切り合はは不明。

SK411 (Fig.22) 方形に近い。SK410に切られる。106×122cm、深さ26cmを測る。

SK412 (Fig.24) 四角長方形を呈す。SK410に切られるが、SK411との切り合はは不明。埋土は砂混じりの茶褐色土である。

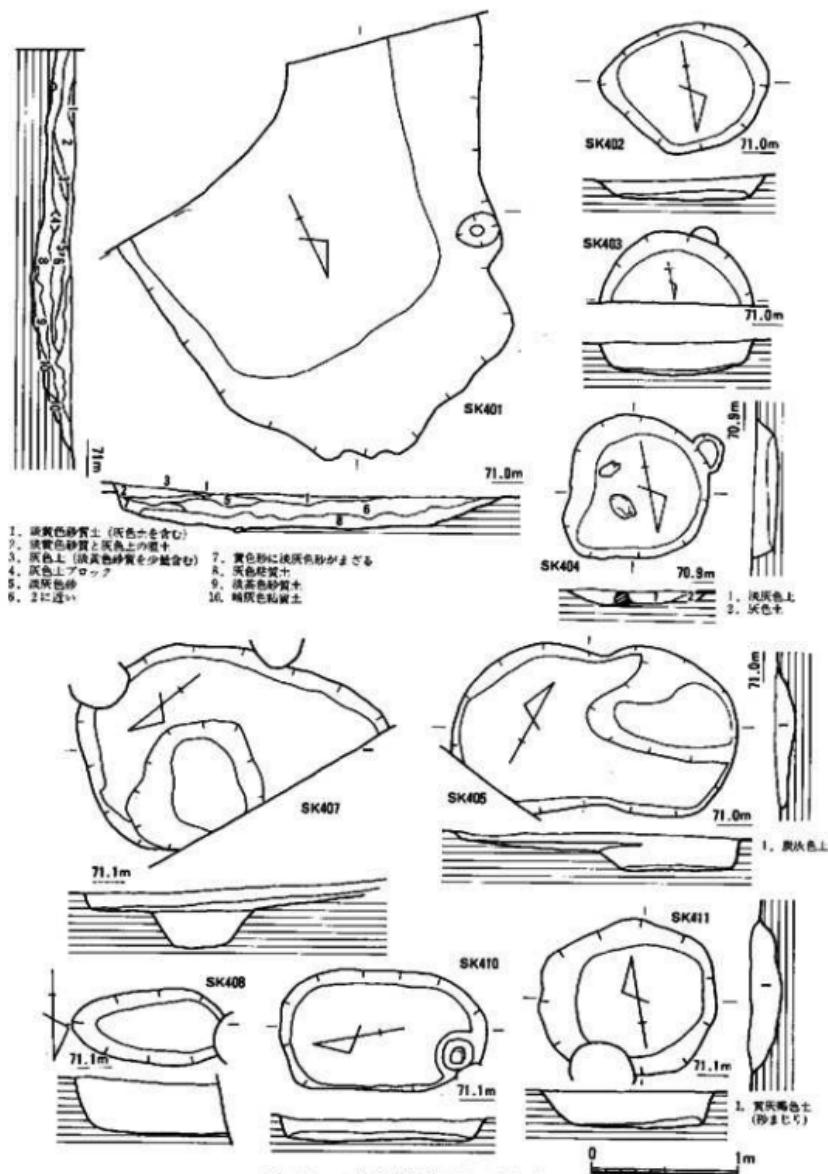


Fig.22 4地点遺構実測図 1 (1/40)

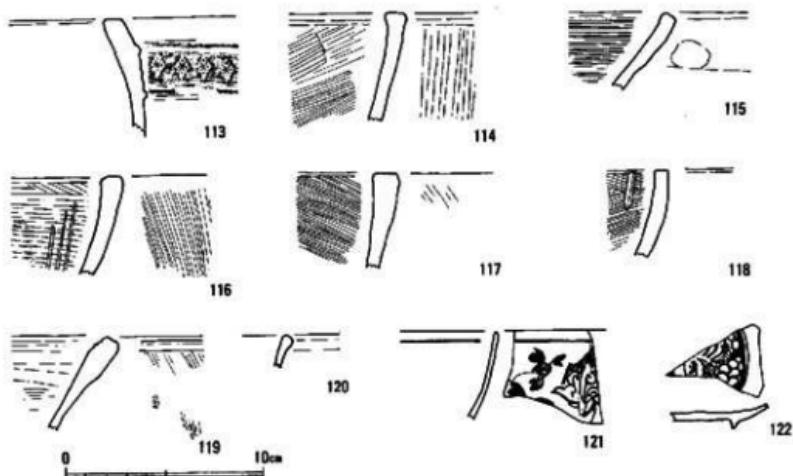


Fig.23 4地点出土遺物実測図1 (1/3)

SK413 (Fig.24) 方形を呈す浅い深い土坑である。ピットには切られる。140×110cm、深さ12cmを測る。

SK414 (Fig.24) 長方形を呈す。北半が一段落ちる。113×70cm、30cmを測る。

SK415 (Fig.24) 縦長の土坑で、SK416、ピットに切られる。約180×80cm、深さ32cmを測る。

出土遺物 (Fig.25) 123は土鍋で断面三角尖帯を巡らす内面は横方向の刷毛目調整である。突帯より下には煤が付着する。124は土鍋で外面に煤が沈着する。

SK416 (Fig.24) 横円形の深い土坑で108×72cm、深さ10cmを測る。砂を含む灰茶色土を埋土とする。

SK419 (Fig.24) 調査区にかかる。横円形を呈す。黄褐色土と粗砂の混土を埋土とする。

SK420 (Fig.24) 調査区にかかり、段落ちに切られるため西、北壁はわずかしか残っていない。東側にはピット状の掘込みがある。灰茶色土を埋土とし20cm大の礫を含む。

出土遺物 (Fig.25) 125は青磁碗である。釉は厚く、深い鈍い緑色を呈す。貫入はわずかに入り、細かな気泡が見られる。胎土は灰白色を呈す。 $\frac{1}{4}$ からの復元口径は15.6cmを測る。126は土器師の坏である。 $\frac{1}{4}$ からの復元で、口径は12cm程度と思われる。127は摺り鉢と思われる。濁った黄褐色を呈す。

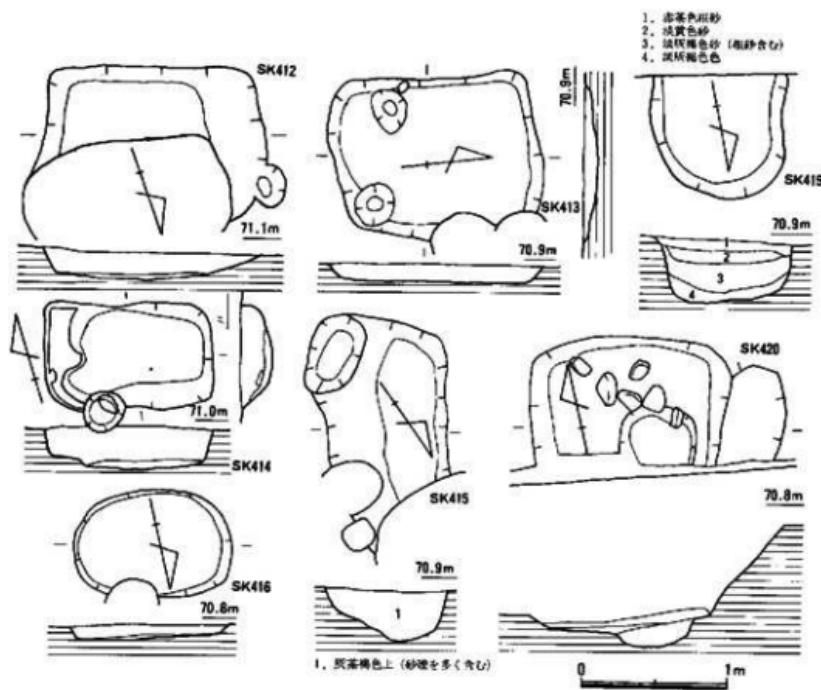


Fig.24 4地点遺構実測図 2 (1/40)

(2) ピット出土の遺物 (Fig.25)

128は口禿の白磁で皿と思われる。青みを帯びた灰白色を呈す。外面最下部は露胎である。129は土鍋で内面は横方向の刷毛目調整、外面は雑なで調整で煤が付着する。130は瓦質の搗り鉢である。口縁部外面は暗灰色、他は灰色を呈す。131は内済する口縁部で内面では稜をもって屈曲する。なで調整で淡灰橙色を呈す。古墳時代の土師器の變と思われる。

(3) その他の遺物 (Fig.25)

132は瓦質の土器で内外面ともに刷毛目調整を施し、内面口縁部は描き状である。 $\frac{1}{2}$ からの復元である。133は青磁碗で釉色は淡灰緑色を呈し、細かい貫入が入る。口縁下外面には低い段がある。134は青磁碗で暗緑色の厚い釉を施し高台内を蛇の目に搔き取る。貫入はわずかに見られる、胎土は青白色である。135は白磁碗である。青白色的釉を施すが外面下部は露胎である。内面では輪状に搔き取る。外面に粗な貫入が見られる。

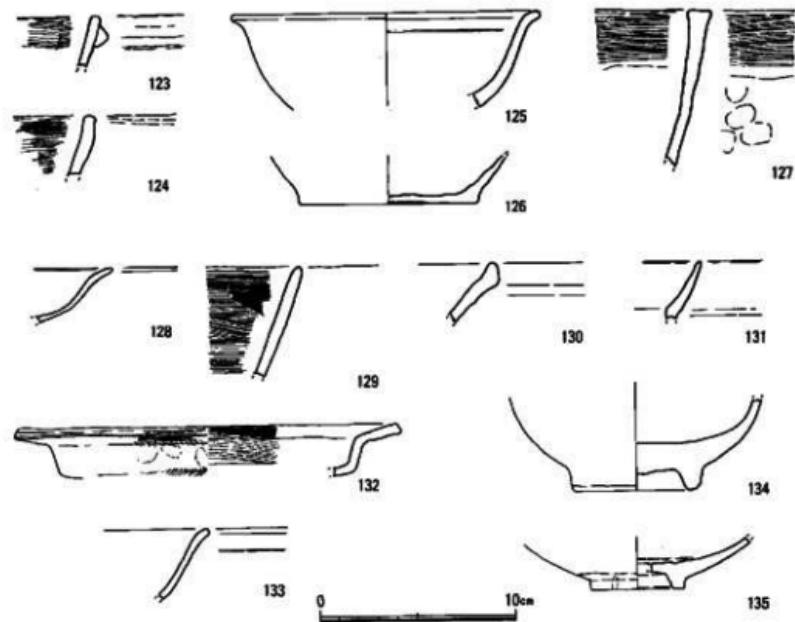


Fig.25 4地点出土遺物実測図2(1/3)

5 5地点の調査

1) 概要

5地点は扇状地中央をほぼ傾斜に沿った調査区で、道水路建設に伴い938m²を調査した。調査区は水田構造時の掘削により4つの段がある。便宜上上下から1区～4区とした。現耕作土、床土を除去した巨礫が露出する黄褐色土の面で遺構を検出した。この黄褐色土は部分によって色、質がやや異なる。検出した遺構は土坑3基と焼上坑8基である。2区では縄文土器を採集したため、遺構を検出したやや赤味をおびた黄褐色土を堀り下げ、押型文土器等を検出した。遺物はやや摩滅しており少ない。明確な押型文土器の包含層と言えるかは疑問である。黄褐色土の下は粗い砂質土層で遺物は採集できなかった。

2) 遺構と遺物

(1) 土坑

SK509(Fig.27) 長方形に近い梢円形を呈す。埋土は砂質の灰色土を主体とする。炭、焼上

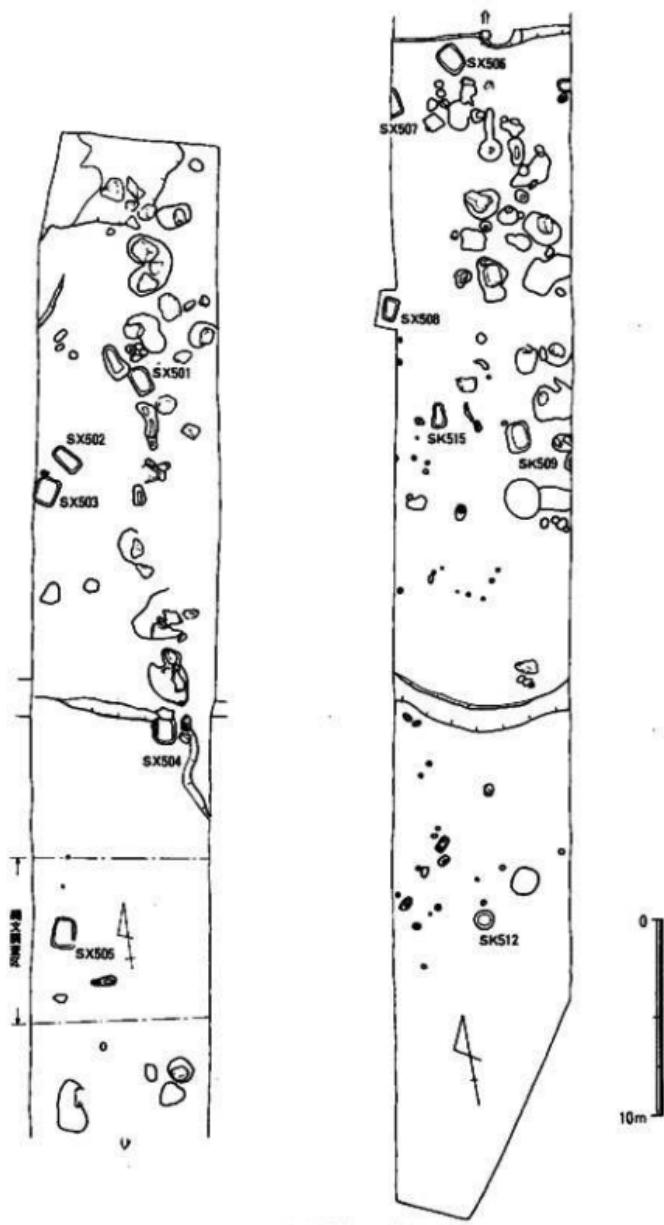


Fig.26 5地点地構造測定図(1/300)

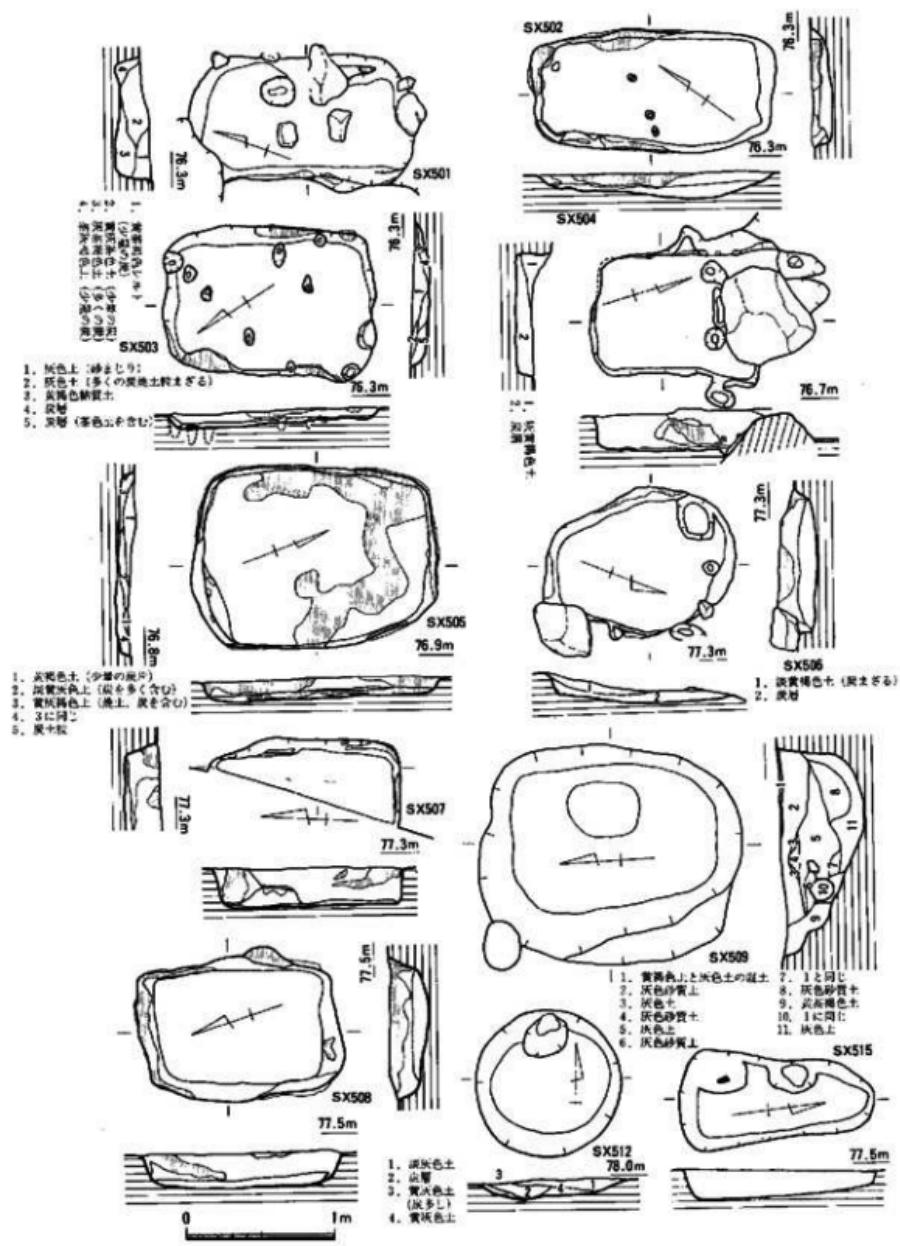


Fig.27 5地点遺構実測図(1/40)

等は見られなかった。

出土遺物 (Fig.28) 148は青白磁の合子の蓋である。外面に黄白色の釉を施し、細かい貫入が入る。胎土は青白色である。 $\frac{1}{6}$ の破片より復元した。

SK512 (Fig.27) 円形の浅いくぼみ状の土坑である。埋土に炭層が見られ、焼土坑に似るが壁は焼けていない。

SK515 (Fig.27) 不整形の土坑で灰茶色土を含土とする。青磁片、糸切りの上部皿の破片を検出したが小片のため図示していない。

(2) 焼土坑

SX501 隅丸長方形を呈す。160×80cm、深さ24cmを測る。礫群の縁辺に位置し、造構内にも大きな礫が露出している。

SX502 隅丸長方形を呈す。164×83、深さ17cmを測る。床面も一部焼けて赤変する。径5~7cmで深さ5cm程の炭が溜まる、くぼみ状の穴が3つある。

SX503 隅丸長方形を呈す、140×100cm、深さ10cmを測る。SX502と同様の穴が8つ見られる。

SX504 長方形を呈す。130+α×82cm、深さ25cmを測る。巨礫が露出しており容量的にかな

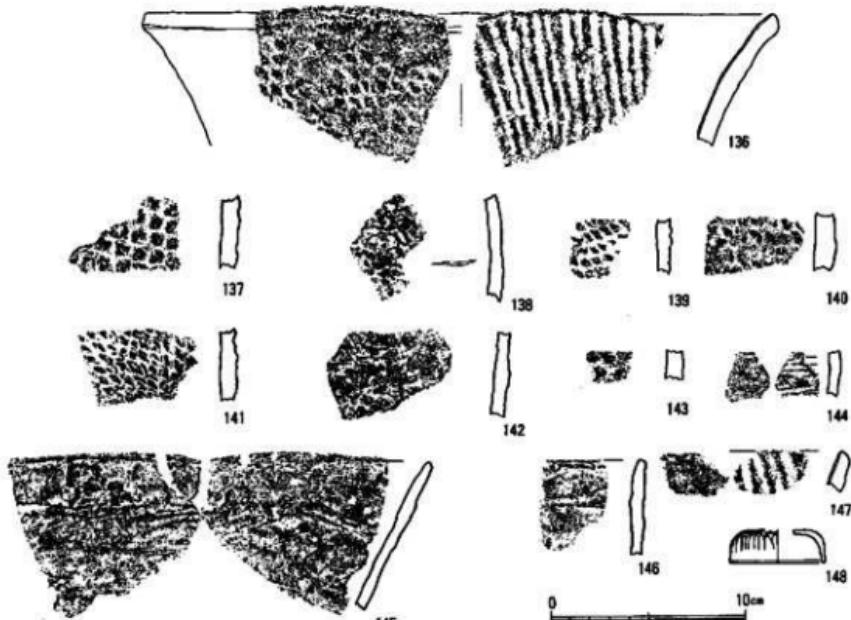


Fig.28 5地点出I.遺物実測図(1/3)

りの規制を受ける。

SX505 長方形を呈す。165×120cm、深さ15cmを測る。壁の焼けが著しく、床面もかなり焼けている。

SX506 不整円形を呈す。68×100cm、深さ26cmを測る。隅に小ピットが見られる。

SX507 調査区にかかり約1mを掘った。深さ37cmと当調査区内では残りがよい。

SX508 長方形を呈す。140×100cm、深さ28cmを測る。

(3) 包含層の遺物 (Fig.28)

136は外面に横走する楕円押型文を施す。内面には6mm幅の同一原体による長い条線を施す。器面は粗れしており外面の文様は不鮮明である。外面は灰黄褐色、内面は淡黄褐色を呈す。137は外面に楕円押型文を施す。小片のため天地不明。内面はナデ調整のようである。外面は淡黄茶褐色、内面灰褐色を呈す。138は器面が粗れおり外面の文様ははっきりしない。胎土、色調が136、137等に似ており押型文の可能性が高い。外面黄茶色、内面は灰褐色を呈す。内面には炭化物が付着する。139は外面にやや小ぶりの楕円押型文が深く施される。外面は茶色、内面は淡灰色を呈す。140は外面に楕円押型文を施すが器面が粗れておりはっきりしない。外面は淡茶褐色、内面は黄白色を呈す。141は外面に楕円押型文を施す。拓本の右半はわずかに左下がり施文するが、左半は傾きが強く縱方向に近い。両者の境は施文が重なる。外面は茶褐色、内面は淡灰褐色を呈す。143は外面に楕円押型文を施す。器面粗れのため不明瞭である。外面黄褐色、内面灰白色を呈す。144は外面は器面粗れのため調整不明、内面は条痕が見られる。灰黄褐色を呈す。147は器面の粗れのため不明瞭だが、楕円の押型文が、内面には7mm幅の条線が施される。145は外面は横方向の条痕調整で口縁部のみヨコナデ。内面には条痕と擦痕が見られる。外面茶褐色、内面は灰褐色を呈し、外面には炭化物が付着する。146は外面は板状の工具による擦過。内面にも擦痕が見られる。茶色を呈し、一部黒変する。148は青白磁の合丁である。

V 大門遺跡 1次調査の記録

1) 概要

島山A遺跡とは小笠木川を挟んで対岸に位置し、油山山塊の南麓山裾との間の狭地である。調査区は横山神社の正面にあたり、神社と関連する遺構の存在も予想された。調査は道路と用水路建設地450m²で行った。耕作土、床土下の灰褐色土を除去した淡茶褐色砂質土の状面で遺構を検出した。検出した遺構は土坑9基、焼土坑2基、ピットである。土坑に検出困難なものがあったため東側部分を約30cm下の黄白色砂質土上面まで下げ、不整形の溝状の掘り込みを検出した。SK10とSK8間の溝は埋土が水田耕作土と同様で1つは現在の水路とも一致しており特に扱わない。ピットは調査区が狭いこともありまとまりは見られない。

2) 遺構と遺物

(1) 焼土坑 (Fig.29)

SX001 長方形を呈す。210×120cm、深さ78cmを測る。上部の壁は崩壊したのか焼けていない。埋土は炭を含む灰色砂質土で、床には炭層が広がる。土師器の破片が出土しているが小片のため詳細は不明である。

SX002 SX001のすぐ西に位置する。190×90cmを測る。壁はあまり焼けていない。黄茶褐色砂質土を埋土とし、床に炭が広がる。遺物は出土していない。

(2) 土坑

SK003 (Fig.31) 185×35cmの細長い土坑で深さ70cmと深い。埋土は灰茶褐色土で均一である。

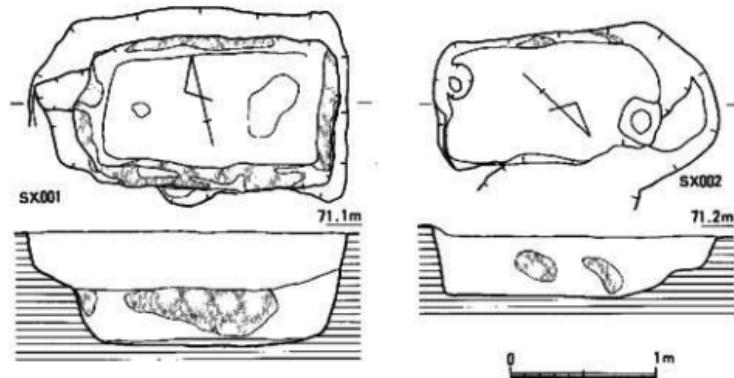


Fig.29 大門遺跡遺構実測図 1 (1/40)

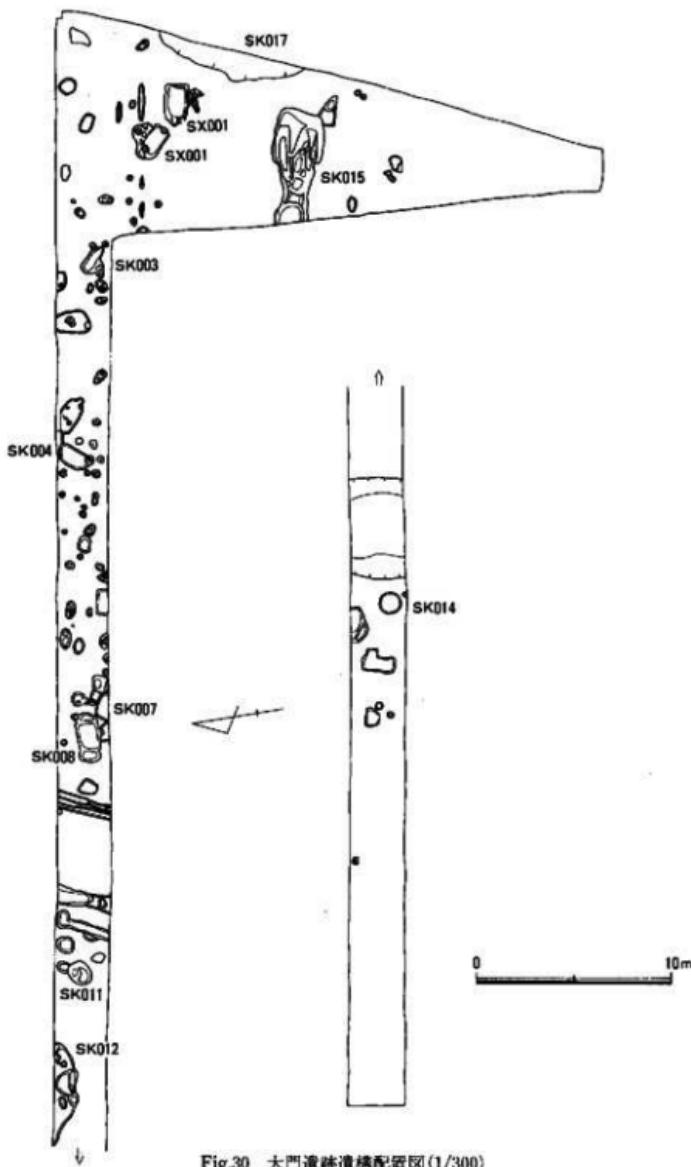


Fig.30 大門遺跡構造配置図(1/300)

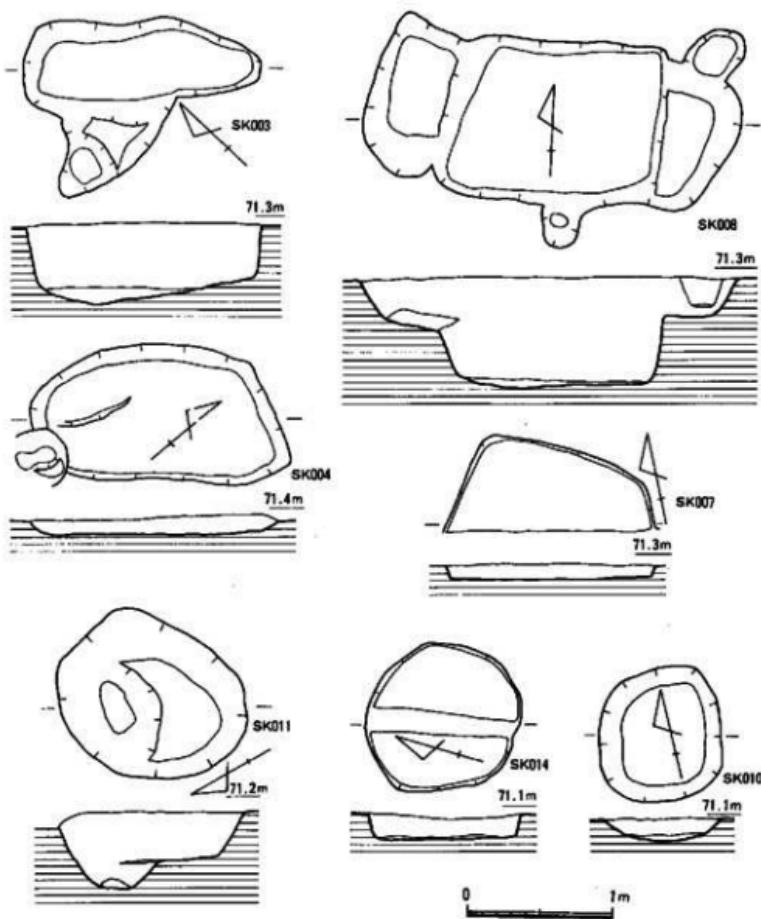


Fig.31 大門遺跡遺構実測図 2 (1/40)

出土遺物 (Fig.32) 1は瓦質土器で外面には格子目状の叩き痕が残り、炭化物が付着する。内面には浅い条痕状の調整痕が残る。叩きの当て具痕か。2は須恵質の鉢で灰色を呈す。この他に土師器の小片が出上している。

SK014 (Fig.31) 不整楕円形の深い土坑で黄灰色を埋土とする。170×90cm、深さ12cmを測る。

出土遺物 (Fig.32) 3、4は糸切り底の土師皿である。3は復元口径7.8cmを測り、灰黃白色を呈す。4は1/3からの復元口径7.7cmを測る。橙白色を呈す。

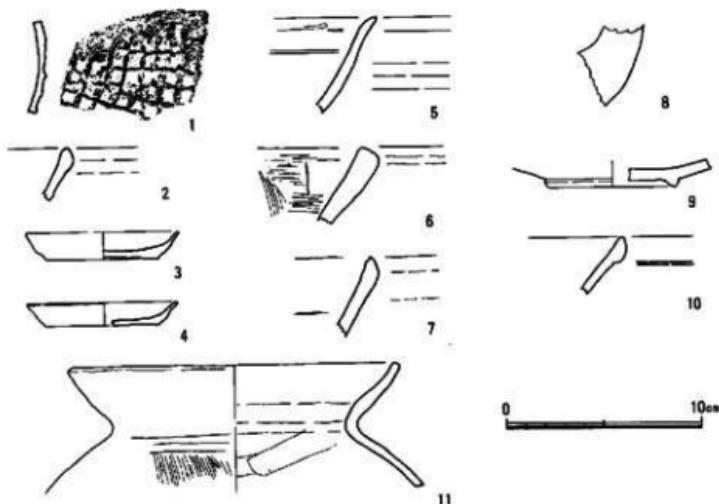


Fig.32 大門遺跡出土遺物実測図 1 (1/3)

SK007 (Fig.31) 浅い掘り込みに炭が溜まる。焼土坑の床の可能性も考えられる。調査区にかかり規模は不明。遺物は縄文土器の小片のみである。

SK008 (Fig.31) 150×110cm、深さ70cmの長方形の土坑の両端に深さ30cmの段が付く。遺構の切り合いとも思えたが、埋土では区別できず、一つの遺構と考えた。埋土は灰茶色土である。土師皿、青磁、白磁、瓦器の破片が出上しているがいずれも小片である。

SK010 (Fig.31) 円形の浅いくぼみ状の土坑で埋土は灰黄色土である。90×82cm、深さ17cmを測る。遺物は出土していない。

SK011 (Fig.31) 不整円形の土坑で北側が深く落ちる。埋土は茶灰色である。130×120cm、深さ50cmを測る。青磁、白磁、土師皿の小片が出土している。

SK012 (Fig.33) 浅い遺構で調査区にかかるため形は不明。灰褐色土を埋土とする。調査区にかかる部分で520cmを測る。

山土遺物 (Fig.32) 5は白磁碗である。口縁部外側に段を持ち、体部には削りによる稜が付く。口縁部内側には沈線を施す。釉は淡黄色で貫入が入る。この他に土師器、青磁、須恵器の小片が出土している。

SK014 (Fig.31) 円形の土坑で茶褐色砂質土を埋土とする。陶器片が出土している。108×100cm、深さ15cmを測る。

SK015 (Fig.33) 不整形の遺構で断面からみると溝状になる可能性もある。床の凹凸が激し

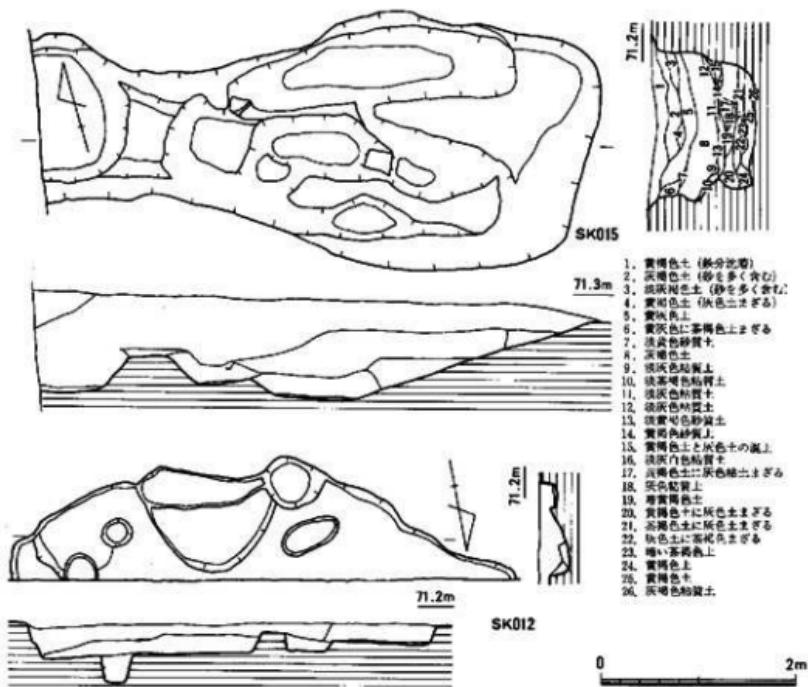


Fig.33 大門遺跡遺構実測図 3 (1/60)

く、遺構の切り合いとも思われる。砂質の灰色土と黄色土が混じり、重なる。残存部分で長さ560cm、幅260cm、深さ100cmを測る。

出土遺物 (Fig.32) 6は土師質の措り鉢で、内面は横方向の刷毛目調整で措り目が入る。外面は刷毛目調整をナデ消したものと思われる。黄白色を呈す。7は須恵質の鉢で灰色を呈す。

SK017 東側の調査区にかかる遺構で溝状を呈す。埋土は縦まりのない淡茶褐色土である。遺物は11が出土したのみである。他の遺構とは埋土が異なり、古墳時代の遺構の可能性もあるが断言しがたい。

出土遺物 (Fig.32) 11は土師器の甕で、口縁緑、外面は頸部までヨコナナデ調整。胴部外面は刷毛目調整、内面は削りを施す。淡橙色を呈す。 $\frac{1}{4}$ からの復元である。

(3) ピット出土の遺物

8は浅い盤状の土器と思われる。粗い砂粒を多く含むが焼きが固く器面は平滑である。灰褐色を呈す。9は瓦器碗で外面淡橙色、内面黒色を呈す。器面は粗れており調整は不明。 $\frac{1}{4}$ から

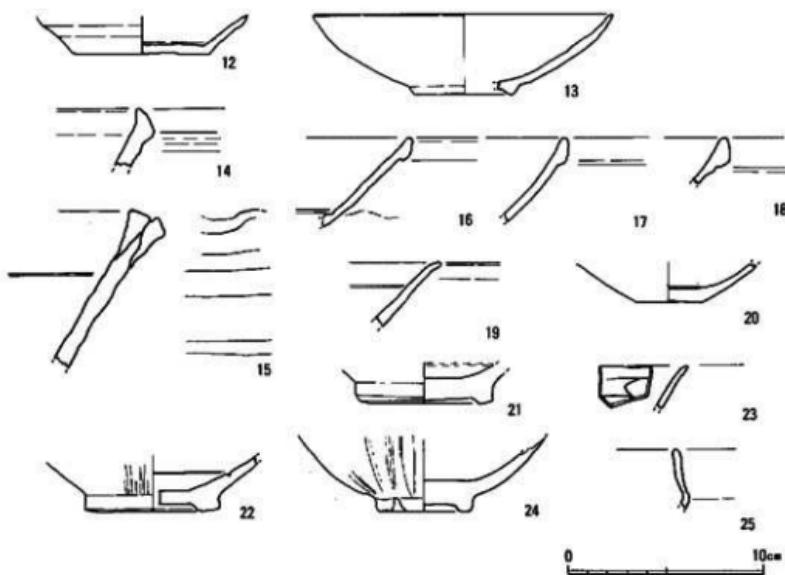


Fig.34 大門遺跡出土遺物実測図 2 (1/3)

の復元である。10は白磁の碗で胎色は灰白色、胎土は白色を呈す。細かい貫入が入る。

(4) その他の遺物

12は糸切り底の土師器の坏である。13は瓦器碗で器面の粗れが著しい。浅い器形で、14からの復元口径は15.4cmを割る。14は須恵質の鉢で灰色を呈す。15は須恵質の鉢で注ぎ口が付く。外面は青みを帯びた灰色、内面は暗灰色を呈す。16から22は白磁である。16は玉縁口縁の碗で淡緑色の釉を施す。体部下部は露胎である。貫入は見られない。内面には沈線を施す。17は灰白色の釉を施す碗である。体部下部は露胎である。18は黄白色の釉を施し、細かい貫入が入る。19は碗で淡緑色の釉を施す。内面に沈線を施し、ここより上から外面には貫入が入る。20は皿で淡緑色の釉を施し、底の釉を搔き取る。内面には浅い沈線が入る。貫入は内面にわずかにみられる。21は白磁の底部に内面に黄色の釉を施し、細かい貫入が入る。内面は沈線に沿って円形に割れている。外面の図示した部分は露胎である。胎土は黄白色を呈す。22は白磁の底部で内面には淡緑色の釉を施し、深い沈線を彫る。外面の図示した部分は露胎である。23は青磁で碗になると思われる。釉は淡灰色で内面に沈線文がみられる。細かい貫入が入る。24は青磁碗で緑色の厚い釉を施す。盤付きの内

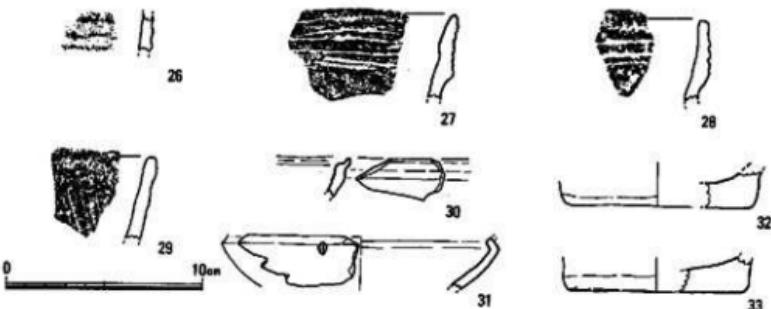


Fig.35 大門遺跡出土遺物実測図 3 (1/3)

側は露胎だが、垂れた釉が付く。外面には鍋連弁文が施される。25は灰緑色を呈す青磁片で、細かい貯入が入る。外面に茶褐色の部分が見られるが、割れ目にあたり全容は不明である。26から33は縄文土器である。26は外面に低い隆起帯が3本見られる。器面が粗れておりはっきりしないが、隆起帯をつまんでいるようでもある。茶褐色を呈す。轟B式か。27は口縁帶に細い沈線を右方向に3本または4本施文する。内面には段が付く。外面はナデ調整で平滑に仕上がる。内面のナデ調整は粗い。外面は暗褐色、内面は灰茶色を呈す。28は口縁帶に4本の沈線を施す。3mm大の大きめの砂粒を多く含む。外面は茶褐色、内面は赤茶色を呈す。27とともに小片のため傾きには疑問がある。29は外面ナデ調整、内面にはわずかに横方向の条痕残る。外面は黄白色、内面は灰褐色を呈す。30は精製の摩研土器である。口縁帶は短く、薄い。暗褐色を呈す。31は器面が粗れているため詳細は不明だが、精製の摩研土器の肩部から胴部である。小ぶりの口縁帶を持つ口縁部が付くものと思われる。肩部には刻み目が1つ施される。 $\frac{1}{2}$ 強からの復元である。32は甌または深鉢の底部で茶色を呈す。外面の底には種子圧痕状のくぼみがある。5mm大までの砂粒を多く含む。 $\frac{1}{4}$ からの復元である。33は淡橙色を呈す底部片で $\frac{1}{2}$ からの復元である。1mm大までの砂粒を多く含む。

VI おわりに

昨年までの調査と同様に縄文時代から中世にかけての遺構と遺物を検出した。時代毎に、気付いた点等を書きとめておきたい。

縄文時代では、遺構は出土していないが各地点で遺物を採集した。5地点では、やや赤味をおびた黄褐色土層から押型文土器が出土している。この層は淡黄色の砂質土の凹部と上に乗るものである。淡黄色砂質土層も一部下がたが、遺物は出土していない。脇山A遺跡5次調査では、D-1地点において淡黄色白色砂質土から押型文土器が出土している。他の地点では、同様の層から晩期の遺物が出土しており、押型文期の包含層かははっきりしない。出土した押型文土器は、器壁が厚手で外面に横走する大型楕円押型文を施し、内面口縁部に縱の沈線をいれる。東九州の田村式に対比できるものであろう。2-I地点では42から44のような小形の石鏡が出土しており早期の可能性がある。これらの小形の石鏡は小河川を隔てた2-II地点では出土しておらず、同期の遺物が河川の右岸の上流に広がる事が推測される。この他、大門遺跡では轟B式と思われる隆起起帶文土器が、2-II地点では阿高系の滑石を混入した沈線文を施す土器が各1点ずつ出土している。1、2、3地点、大門遺跡では、晩期中ごろの土器が出土している。大門遺跡の27、28などは口縁部に沈線を施す深鉢があるが、沈線がはっきりせず調整も粗く新しい特徴を持つ。93のような浅鉢も口縁部が不明瞭で調整が粗い。色調も赤味を持っている。いずれにせよ、まとまった量ではなく、上流からの流れ込みと考えられる。

弥生時代では1地点で須玖式の甕が出土している(16)。古墳時代は1地点、大門遺跡で壺の口縁部が出土したのみである。

中世は今回の調査で主体を占めており、調査区全体で遺物を検出している。2-II地点、4地点、大門遺跡では、遺構もまとまって検出できた。2-II地点は、脇山A遺跡4次調査12地点に近接しており、間に小河川が入るものとの同一のまとまりになると思われる。SK005からは鐵滓を出土しており、遺構の性格でも関連がありそうである。遺物は板目压痕を持つ糸切り底の上師皿、白磁、青磁碗等を出土しており、13世紀を中心とし14世紀までにおさまると思われる。これに対し4地点では明代の染付碗、厚く純い発色の釉を施す青磁碗等が出土しており、15世紀以降のものと考えられる。4地点ではピットを多く出土しており、建物のまとまりが予想される。この他、1地点のSK111からは7枚の土師皿と、壺が出土しており、13世紀初頭前後のものと思われる。まわりは焼土坑のみで單発的な感がある。調査区全体に広がる遺構はこれまでの調査と同様に焼土坑のみで、集落は小規模なものが散在するものと思われる。

図 版



(1) 脇山A遺跡 1地点全景（東から）



(2) 脇山A遺跡 2 - I 地点全景（東から）



(1) 脇山A遺跡 2 - II 地点全景 (東から)



(2) 脇山A遺跡 3 地点全景 (東から)



(1)臨山IA道路4地点全景（東から）



(2)臨山IA道路5地点全景（北から）



(1) 大門遺跡全景（東から）



(2) 大門遺跡全景（南から）



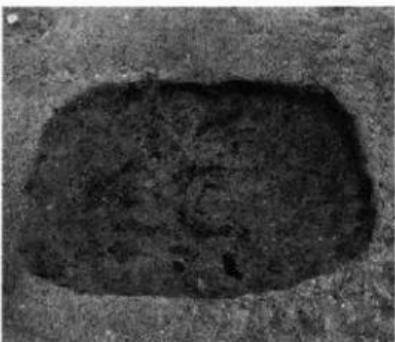
(1)SK111 (北から)



(2)SX102 (東から)



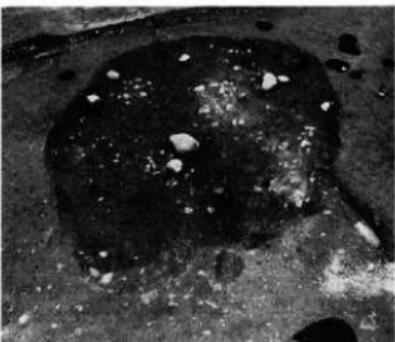
(3)SX104 (北から)



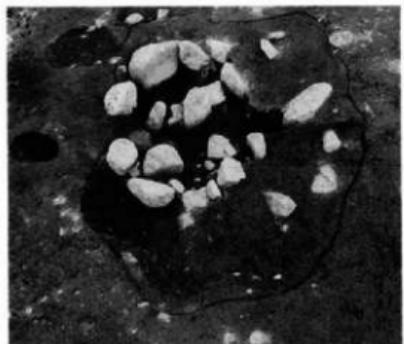
(4)SX105 (北から)



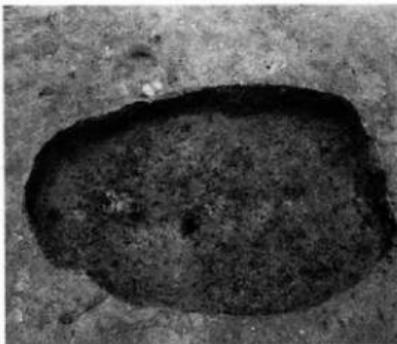
(5)2-II地点全景 (南から)



(6)SK205 (北から)



(1)SK207 (東から)



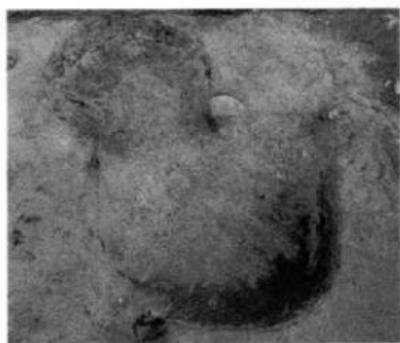
(2)SX301 (北から)



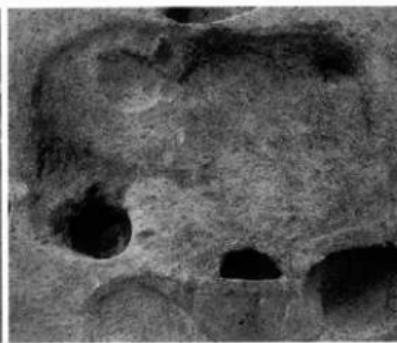
(3) 4-II地点全景 (南から)



(4)SK401 (北から)



(5)SK410, 411, 412 (西から)



(6)SK413 (東から)



(1)SK503 (東から)



(2)SX504 (東から)



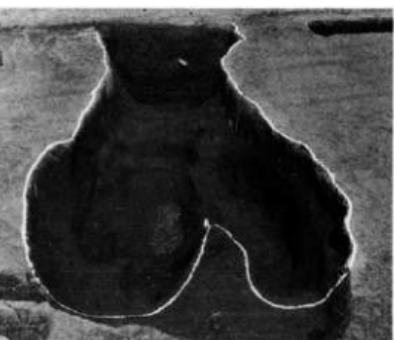
(3)SX512 (東から)



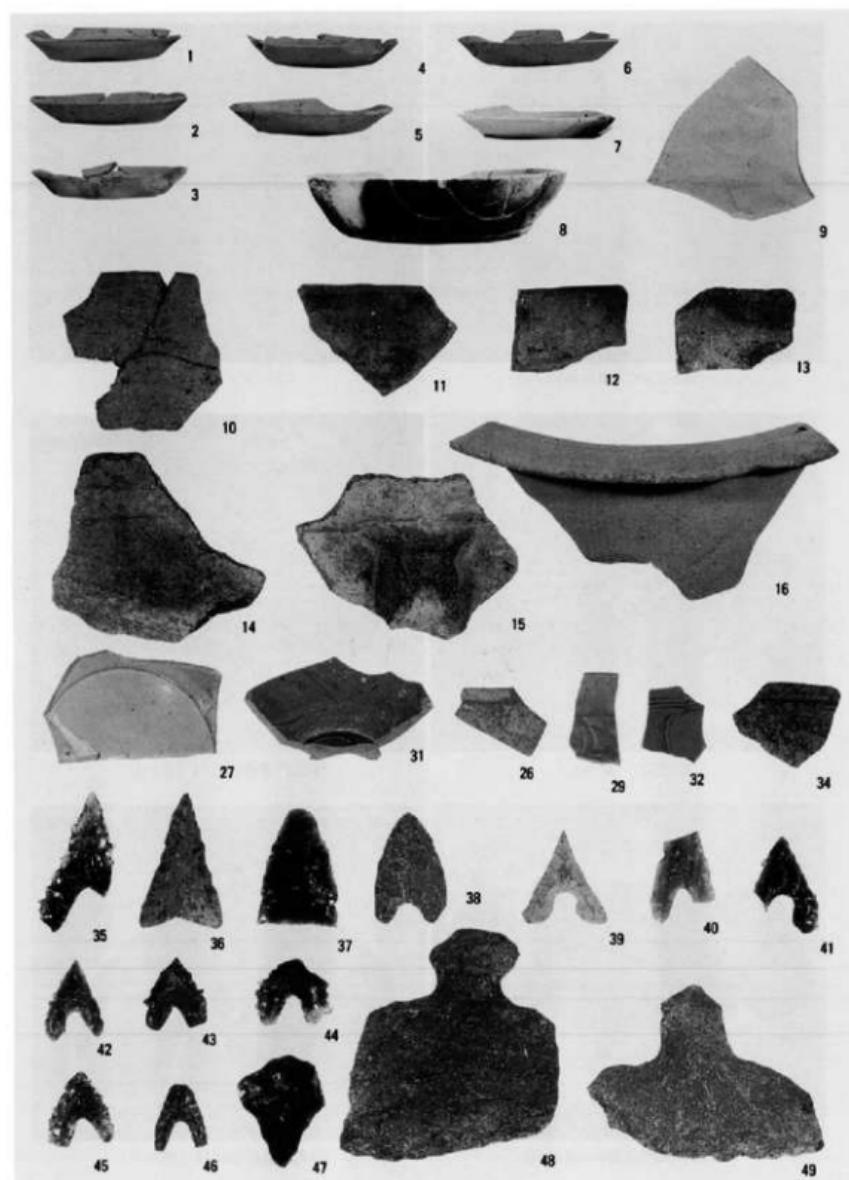
(4)大門遺跡SX001 (南から)



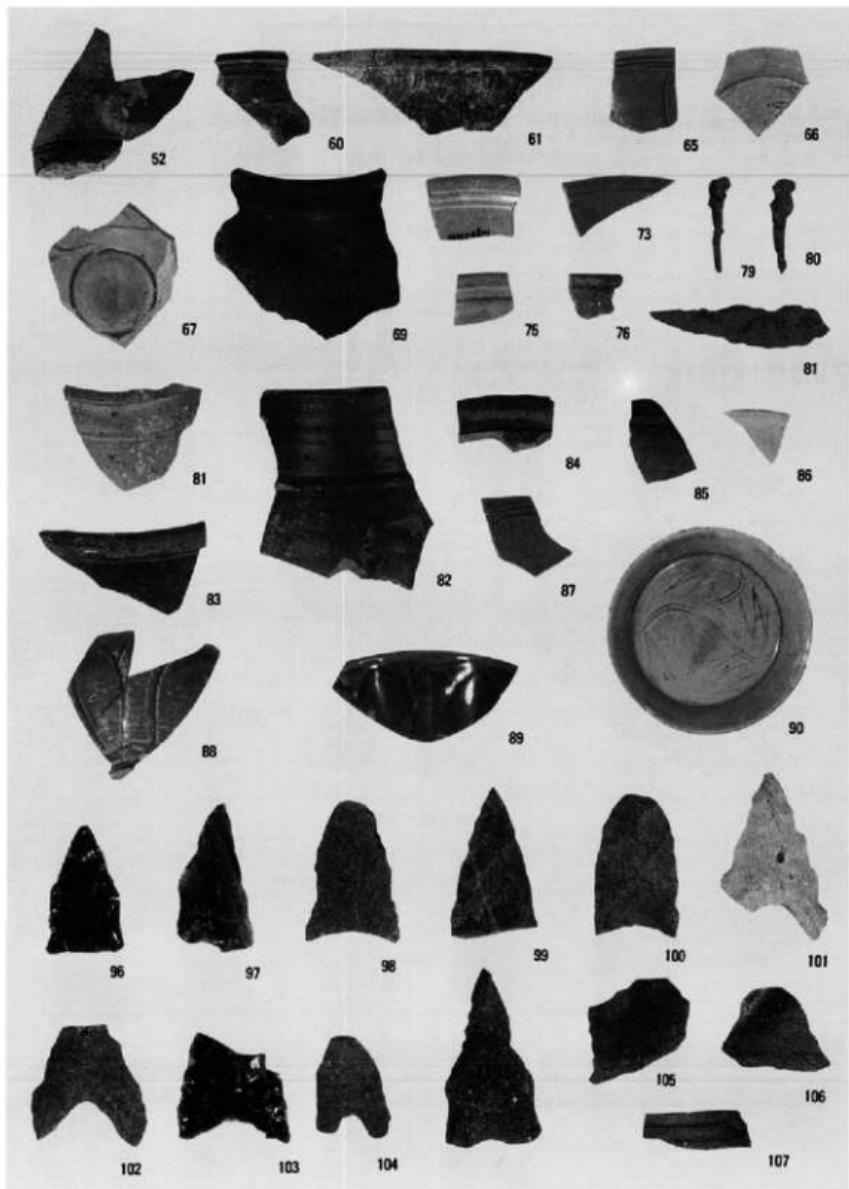
(5)大門遺跡SK008 (南から)



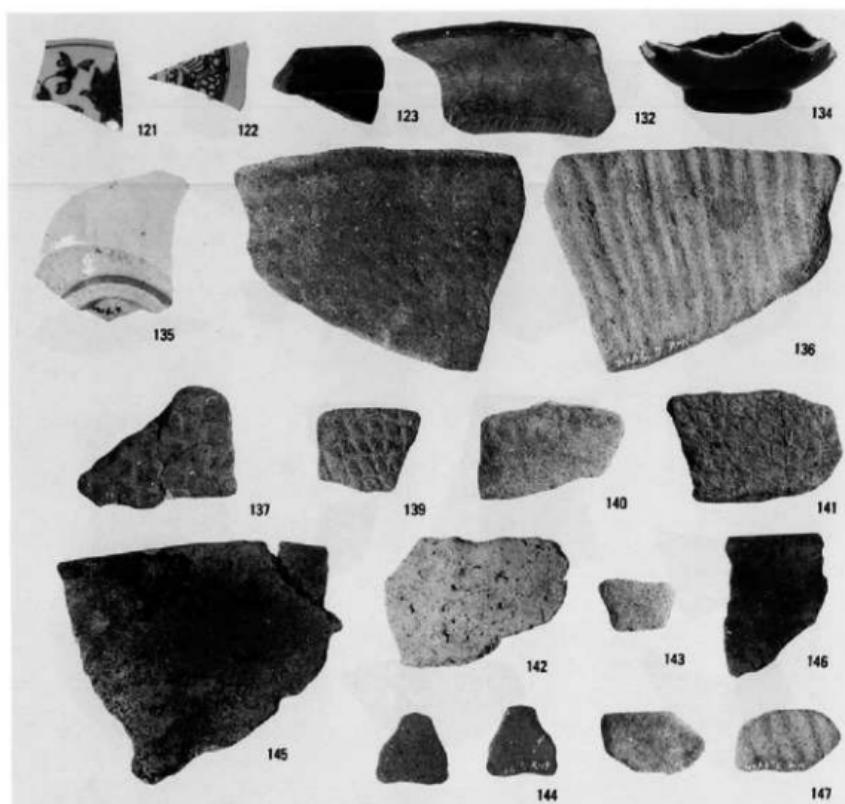
(6)大門遺跡SK015 (東から)



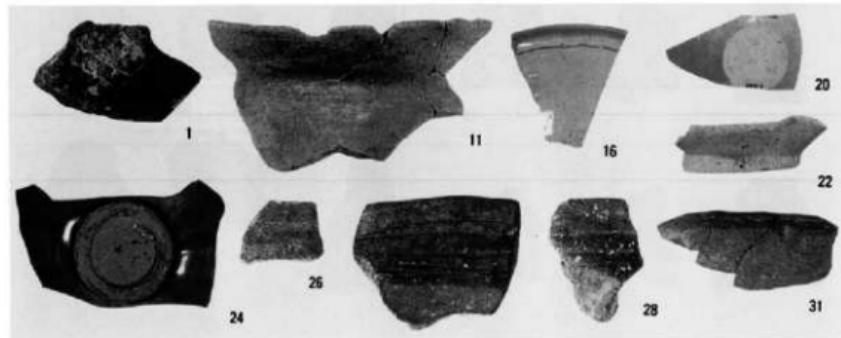
陽山A遺跡出土遺物(1)



駱山 A 道路出土遺物(2)



(1)臨山A遺跡出土遺物(3)



(2)大門遺跡出土遺物

わき やま
脇 山 V

—県営圃場整備事業に伴う脇山A遺跡6次調査報告—

福岡市埋蔵文化財報告書第344集

1993年（平成4年）3月31日発行

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 アド印刷株式会社

福岡市博多区博多駅南5丁目20 30
